新谷壮介シリーズ　Ｓ－Ｐｒｏｏｆ　鬼の仮面

Ｈａｒｒｙ英仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新谷壮介シリーズ　Ｓ－Ｐｒｏｏｆ　鬼の仮面

【Ｎコード】

Ｎ４７５４Ｄ

【作者名】

Ｈａｒｒｙ英仁

【あらすじ】

大学の写真サークルに所属する壮介と瑞希は、大学祭に出展するための写真を撮影するため水崎湖へとやってきた。そこで二人は凄惨な殺人事件に巻き込まれてしまう。「鬼の一族」と呼ばれる旧家をめぐり、事件は謎と狂気に包まれていく。

第一章　撮影旅行（前書き）

この小説には一部残虐な描写があります。

第一章　撮影旅行

一

「間もなく〜、水崎〜、水崎です」
車内アナウンスが終わると同時に、俺は隣に座っている瑞希（みずき）に顔を向けた。
「おい瑞希。次、降りるぞ」
「くー……」
瑞希はいつの間にか夢の中。
「おい、起きろって。もうすぐ着くぞ」
俺は瑞希の肩を揺らした。
「くー……」
しかしこの程度で起きることはなかった。
まあ無理もない。朝の弱いこいつが、朝イチの電車に間に合うように起きてきたのだ。それから新幹線と在来特急、そして今俺たちが乗っているローカル線と立て続けの移動。さすがに疲れが溜まってくるというものだ。

キキーッ

俺の足元でブレーキのかかる音がした。もう到着する。マジで起こさなければ。
俺は握り拳を作り、そして……、
ゴツッ！
「う〜、い、痛い……」
ようやく起きた。頭をさすりながら、こちらを睨みつけてきた。
「アホ。電車の中でマジ寝するんじゃねーよ。もう着くぞ」
「え、え、そ、そーなの？」

瑞希が言い終わるのと同時に、電車が完全に停車した。
俺は顎で合図をし、座席から立ち上がり、ドアの前に立った。

俺の名前は、新谷壮介（しんたにそうすけ）。
全ての事の発端は、俺が大学に入学した頃であった。
今まで小中高と極めて無感動な学生生活を過ごしてきた俺は、大学に入るに際し、何かを始めてみようと思った。理由は単純で、TVや映画であるようなキャンパスライフへの憧れであった。しかし、今更体育会系になんかなれないので、文化系のサークルに入ってみることにした。何件か体験入部してみて、最終的に行き着いたのが写真サークルであった。別にカメラに興味があったわけではないのだが、部の雰囲気が何となく良かったから入ることとなった。
最初は先輩の撮った作品を観たり、撮影している姿を眺めているだけであったが、いざ自分でやってみると、これがとても楽しかった。自惚れかもしれないけれど、自分の撮った写真が芸術作品のように感じた。そしてこれよりもっと綺麗な写真を撮ってみたいと思うようになり、いつの間にかのめりこんでいた。一生懸命バイトをして、一眼レフを購入したりもした。ちょっと前の自分ではとても想像できないような姿であった。俺はカメラが、写真が大好きだった。俺はこの大好きなもので自分を思い切り表現していきたいと思った。
そして俺の隣にいる瑞希の存在も大きかった。瑞希は大学の同級生であり、何を隠そう俺の彼女だ。
瑞希と俺が知り合ったのは写真部の新歓コンパだった。瑞希は俺の少し後に写真サークルへやってきた。最初は挨拶を交わす程度の仲だったが、お互い写真が好きだったので、次第に話すことが多くなった。それは即ち一緒に過ごす時間が多くなっていくということでもあり、何だがいつの間にかこういうことになってしまっていた。後輩に「先輩達はいつから付き合っているんですか？」と聞かれることがあるが、正直な所、付き合い始めた日というものは、俺にも

判らない。そして瑞希も判らないと言っていた。ただ、「ホントに付き合っているんですか？」と訊ねられると、「うん」と二人息ピッタリである。だから、部内では「不思議ちゃんカップル」なんて影で呼ばれているらしい。

俺は瑞希の方を観た。横に並ぶと俺の目線は瑞希の目に重なる。俺の背が低いのではない。瑞希の背が高いのだ。高校以来ちゃんと計ったことはないのだが、何でも百七十センチは超えているそうだ。ヒールの高い靴を履くと、俺よりも背が高くなってしまう。以前は笑いのネタに、ヒールの高い靴を履くことが多かったのだが、誰かに「壮介君が気にしている」と吹き込まれたようで、それ以来スニーカーを履くことが多くなった。別に俺は何も気にしてはいないが……。

見た目は、他の人が言うには「お嬢様風」らしい。確かに特段美人というわけではないが、目鼻立ちは整っており、清潔感はあると思う。

まあ、そういうところも好きになってしまった理由の一つなのかな……。

ていうか、これって、オノロケ？

二

「みずさきえ～き」

瑞希が古びた無人駅に掲げられた看板を指差して笑った。

先に駅舎から出ていた瑞希を追い、俺も駅舎から出た。

「まあ、何もねえな」

俺は思わず呟いた。駅舎の前は小さなロータリーになっているが、キレイに舗装されているわけではない。駅前の空き地というか、荒れ地というか、とにかくそんなカンジであり、隅の方に、これまた年代を感じさせるバス停がポツンとあるだけであった。

「ここからバスで行くのか？」
俺は瑞希に訊ねた。
「ううん、ここから歩いていくつもり。ネットの地図だと、駅から北に歩いて十五分くらいかな」
瑞希はカバンに入れてあった地図を俺に向けてきた。俺はその地図に目を通した。
「この地図だと、駅を出て前の道を右に行くんだな」
「そうみたいだね。じゃ、行こっか」
言い終わるのと同時に、瑞希が前を歩き出した。

俺たちが降り立ったのは、X県の水崎町という所。主な産業は温泉と冬場のスキーくらいというなかなか辺鄙な所である。何故俺たちがここへやってきたかというと、写真を撮るためである。元々は秋に行われる大学祭に出展するための写真を、夏休みを利用して撮影するということになっていた。そして、どこで何を撮ろうかと思案していた時、瑞希がネットサーフィンで偶然水崎町にある水崎湖の写真を見つけたのである。この水崎湖というのが、ＨＰにＵＰされていた写真ではあるが、とても美しいものであり、またこの地域でしか見られない貴重な草花も多数群生しているらしい。まあそんなカンジで瑞希と相談し、水崎湖を出展用の題材にすることを決めたのだ。
そして俺たちは、その撮影旅行でこの水崎町に来ているのである。

三

「あ、見えてきた」
瑞希が少し早足になった。何が見えたのかは、横にいる俺には見当がつかない。
「湖が見えてきたのか？」
俺は前に出た瑞希の背中に向かって訊ねた。すると瑞希が歩きな

がら首だけ振り返った。
「違う、違う。今日泊まる民宿の看板が」
そう言って、瑞希は前方を指差した。
「あ、ホントだ」
俺たちから五十メートルくらいの所に、「民宿　しまだ」という看板が掲げられていた。
前を歩いていた瑞希が、ある看板の前で立ち止まった。
「どうした？」
後ろから覗き見ると、そこには水崎湖の案内図が描かれていた。
「湖も近いのか？」
「うん、ここからじゃ林があって判らないけど、もうちょっと行った所で別れ道になって湖畔の方へ抜けれるみたい」
そこからしばらく歩くと、「しまだ」の手前に別れ道があり、矢印による案内図で「直進　水崎温泉　右折　水崎湖畔遊歩道」となっていた。
「温泉もあるのか？」
横目で瑞希に訊ねてみた。
「うん、規模は小さいけど。といっても、源泉はここじゃなくて、近くの温泉郷から引湯しているみたい」
瑞希は地図に書かれたメモ書を俺に見せた。正直俺はこの旅行に際し、現地について殆ど調べていない。言いだしっぺということもあり、瑞希が下調べや民宿の予約等をしてくれていた。
「じゃ、とりあえず今日のお宿に行こうか」
瑞希が再び前を歩き出した。
「おい瑞希、行くったって、まだ昼前だぞ。チェックインには早くないか」
普通ホテルや旅館のチェックインって午後三時以降だったような気がするのだが……。
「大丈夫。荷物だけ置かせてもらえるよう、予約の時に頼んであるから」

今までとにかく雑把な性格と思っていたが、意外や意外だ……。
そんな事を感じながら、俺は瑞希の後に続いた。
「さーて、着いたよ」
そして遂に、俺たちがお世話になる「しまだ」にたどり着いた。外観は民宿というだけあって、豪華絢爛というわけではなく、ちょっと大きな民家といった感じだ。建物自体は少し古くなっているようだが、綺麗に整備されており、汚さは全く感じなかった。
「あら、いらっしゃいませ」
玄関口まで行くと、中からエプロン姿のおばちゃんが出迎えてくれた。
「すみません、今日からで予約していた岡本です」
岡本……瑞希の苗字だ。
「ああ、岡本さんですね。お待ちしておりました」
「取り合えず、荷物だけ置かせてもらいます。夕方までには戻ってきます」
「はい、判りました。ごめんなさいね。部屋が空いていたらお通しできるんですが、まだ準備ができてなくてね。準備が終わったら、お部屋の方にお荷物を運んでおきますね」
このおばちゃん、この民宿の「女将さん」であろうか。見た目はどこにでもいるおばちゃんスタイルだが、物腰は柔らかく、親近感のある肩肘を張らない応対の仕方であった。
「どうも、お世話になります」
俺も瑞希の横に並び挨拶をした。
「はい、いらっしゃい」
女将さんは笑顔で迎えてくれた。
「では、すみません。荷物お願いします」
瑞希は自分の荷物を玄関口に置いた。
「瑞希、カメラカメラ」
この旅行の目的は撮影だ。カメラは持っていかなくては。
「わかってる」

瑞希はカバンを開け、カメラの入ったバッグを取り出した。俺もカバンからカメラを取り出した。
「スミマセン、お願いします」
俺はカバンを瑞希のカバンの隣に置いた。
「これから、どちらへお出かけですか？」
カバンを手に持ちながら、女将さんが訊ねてきた。
「これから水崎湖の方へ行ってみようと思います」
俺が言うよりも早く、瑞希が応えた。
「ああ、そうですか。水崎湖は今が一番キレイな時ですよ」
女将さんが笑顔でそう返してきた。俺たちも笑顔で応える。
「瑞希、それじゃ行こうか」
「うん！」
そして俺たちは「しまだ」を出発。水崎湖へと向かった。

四

「しまだ」を出た俺たちは、さっき見た看板の通り湖畔方面へと歩いていった。別れ道に入って二、三分程歩くと、水辺が目の前に広がってきた。
「さーて、水崎湖に到着！」
瑞希が水辺へと走っていった。道の端まで行き着くと、俺の方に手招きをしてきた。
「壮介君、こっちに遊歩道の入り口があるよ」
その声に俺も駆け足で向かってみた。
「水崎湖畔遊歩道。これで湖は大体一周できるみたいだね」
俺たちは遊歩道の入り口に掲げられた案内図を見ていた。これによると、この遊歩道は途中何箇所か途切れてはいるものの、湖を一周できるルートのようである。また湖の周りにはキャンプ場や貸ボート屋なんかもあるみたいだ。
「ねえ、後でボートも乗ってみようよ」

「うん、そうだな。湖の中からも撮ってみたいしな。でもカメラ落とさないように気をつけんとね」
そんな話をしながら、俺たちは遊歩道へと入っていた。
遊歩道に入ってからは、散歩がてらカメラを取り出して、ここと思う所でシャッターを切っていった。
遊歩道自体はまだできて間もないのか、綺麗に整備されていた。所々にベンチやトイレが設置されている。
「でも、周りは寂れちゃってるね」
瑞希がカメラを片手にそう呟いた。
湖畔にはキャンプ場の他にも、色々な建物があったのだが、その殆どに人の気配がしなかった。つまりは廃屋ということである。民家や別荘と思われるもの、中には旅館と思われる建物もあった。因みにボート屋は営業していたが、残念ながら今日は定休日とのことで、シャッターは閉まっていた。瑞希はボート屋の横にかかる桟橋に繋がれていたスワンボートを残念そうに見つめていた。
俺は廃屋の一つに近づいた。この廃屋はかなり古いようで、ガラスは全て割れ、屋根も崩れかかっていた。見渡すとけっこうな規模の建物で、かなりの豪邸だったことが伺える。昔はけっこういい暮らしをしていたのに、何らかの理由でここを手放さなくてはいけなくなったのだろうか。そう考えると、ちょっと切ないかも……。
ピピッ
背後から電子音が聞こえた。デジカメの電子音？
「って、コラ瑞希！」
振り返ると、瑞希が俺に向かってレンズを向けていた。
「何不意打ちで撮ってんだよ！」
「え～、だって何かいい雰囲気だったから」
瑞希はニヤニヤしながら、再び俺にレンズを向けた。
「アホ。俺なんかとってどうするんだよ。撮るモノが違うだろ！」
「いいでしょ、旅の思い出ってヤツ。それに……」
「それに？」

俺が訊ねると、瑞希は少しもじもじした様子になった。
「初めてだよね、二人で旅行するの。思い出作りみたいな……さ」
そう言って、カメラを持ったまま俺に近づいてきた。
な、何だこの展開……。
「うちらさ、付き合い始めてからけっこう経つけど、あんまり恋人っぽいことってしたことないから。だから……」
いつの間にか、瑞希の顔が俺の鼻先にまで迫っていた。気のせいだろうか、顔が熱い。
「だから……、この旅行では、い～っぱいイチャイチャしたいの」
そして瑞希の顔がさらに近づいて
「ちょ、オイ」
俺が制するよりも早く、瑞希の唇が俺の頬に触れた。（制すると言っても、本気で避ける気は……なかった）
「フフッ、フレンチキ～ス」
瑞希はクルリと振り返り、俺に向かって舌を出した。まるでいたずらに成功した子供のようだった。
「ねえ、ドキドキした？」
いたずらっ子のような表情で訊ねてきた。
「アーホ」
俺はそう言い捨ててやった。内心は、ちょっと……ね。
「え～、何それ」
「うるせーよ」
照れ隠しもあるのだが、俺は瑞希にソッポを向き、遊歩道を進んでいった。
「あ、ちょっと待って。カバン～」
瑞希はボート屋の近くに置いていたカバンを取りに行ってからこっちへ走ってきた。
そして、
「エヘッ」
と俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

……って胸が当たってますがな！
「あ～、エッチ！」
何でこんなに敏感なんですか！？もしかして表情に出ているのか！？
「うるせーよ。貧乳のくせに！」
「あ～、ひどい！　貧乳じゃないもん。ちゃんと谷間できるもん。壮介も知ってるでしょ！」
「あんなモン、偽装もいいところだよ！　寄せて上げてに必死だったじゃねーか」
「あ～、そんなこと言うんだ。壮介君だって、……はじめての時」
「そこまで言わんでいい！」
真昼間に何て会話してんだ俺たち。
「ていうか、あんまり引っ付くなって。何だよそのカバン。ずっと気になってたけど、何入ってんだそれ？」
俺は瑞希の持っているカメラバッグを小突いた。瑞希の持っているカメラはコンパクトデジカメ一つなので、こんな重くはないはず。つまりカメラ以外に何かが入っているということである。
「ああ、これね」
瑞希は手を離して立ち止まり、カバンの中身を俺に見せてきた。
「これは……」
俺がカバンの中に目にしたもの、それはビデオカメラであった。
「瑞希、これってもしかして」
俺はこのビデオカメラに見覚えがあった。というか、よく知っている。このビデオカメラは、俺が瑞希の誕生日にプレゼントしたものであった。
「これ、持ってきてたんか」
「うん、動画も撮りたいな～って思ったから、ちょっと重くなるけど持ってきたの」
再度言うが、この旅行は大学祭に出展する作品を撮るための撮影旅行。写真部だから、動画は出展する予定はない。

俺が口を開こうとすると、
「おもいでづくり～」
瑞希はビデオカメラを取り出し、撮るマネをして俺に笑いかけてきた。

もっとイチャイチャしたい

それは瑞希の本心なんだと思う。
愛の告白なしではじまった俺たちの関係。瑞希は俺の気付かない所で不安になっていたのかもしれない。「本当に自分たちは恋人同士なのだろうか」と。だからこの旅行に積極的だったのかもしれない。自分たちの関係を再認識するために。もっと恋人っぽくなるために。ボート屋が休みで残念そうにしていたのは、単に自分の好奇心を削がれたためではない。俺とボートに乗ることができなかったから……。そんな健気な想いで、今俺と一緒にいる。そう考えると、何だがこっ恥ずかしくなってきてしまった。
「はいはい、思い出作りね」
思わず苦笑いをして、瑞希に背を向け歩き出した。
瑞希も、俺の横に並んで、同じ歩幅で歩き出した。
そして再び唇を俺に近づけてきた。
「フフフ、フレンチキ～ス」
半ば開き直って声を揃えてやった。アホな二人だ。
しかし何だかんだ言っても、お互いの心が通じ合うまでの仲になっているようであった。

五

それからしばらくの間、俺たちは木崎湖畔の風景を撮り続けた。
もっとも、カメラで撮影しているのは俺だけで、瑞希の方はというとビデオカメラで動画を撮影し続けていた。しかも撮影しているの

は風景ではなく俺だ。まさに「撮る人は撮られる人」である。
俺たちがキャンプ場の近くにある古びた神社の横を通り過ぎようとした時であった。
カランカラン……
神社へと続く階段から何かが転がってきた。このままでは湖に一直線だ。
「よっと」
何だか判らなかったが、湖に落ちるのは阻止しようと思い、足を伸ばして転がってきたモノを止めた。
「壮介君、それレンズじゃない？」
瑞希が俺の後ろから覗き込んできた。俺はそのモノを拾った。確かにそれはカメラのレンズであった。
「なんでこんな所にレンズが」
俺が呟いたその時であった。
「あ～、すみませ～ん」
階段の方から女性の声が聞こえてきた。
俺と瑞希は同時に振り返った。そこには階段を降りてくる一人の少女の姿があった。
よく見ると、その少女は肩からカメラをぶらさげていた。
「これ、あなたの？」
俺の足元に転がっていたカメラを瑞希が拾い上げた。
「あ～、すみませ～ん」
階段を降りきった少女は、俺たちの方へ近づいてきた。階段の上にいた時には気付かなかったが、少女は身長が百五十センチあるかないかの小柄で、歳も十六、七ぐらいであろうか。またおかっぱ頭ということもあり、見た目は割りと幼い感じであった。
瑞希は少女にレンズを渡した。
「フードに少し傷がついちゃってるけど、レンズ自体に傷はついてないみたい。気をつけてね」
「あ～ありがと～。いやぁ、階段の上から落とした時、もうダメだ

って思ったけど、よかった〜。このレンズ、けっこう高かったのよねぇ」
少女はそう言いながら、レンズにキャップをつけ、リュックの中にしまった。見た目の割りに、おばちゃんっぽいしゃべり方をしていた。
「ところで、こんな所でなにしてんの？」
少女は俺たち二人を見て言った。……ていうか、タメ口だ。
「俺たちは、湖の風景を写真に撮りに来ているんだ。遊歩道沿いに来たからこの神社の前に出てきた」
俺は不快感を滲ませながら、ここに来た経緯を説明してやった。
「お前こそ何やってたんだよ。こんな所で」
すると少女はムッとした表情になった。
「まっ、お前とはご挨拶ね。敬語を使えとは言わないけど、言葉遣いは気をつけなさいよね」
「なっ！」
少女の思わぬ反応に、俺は目を丸くした。な、なんだこのガキ！
「べ、別にフツーじゃねえかよ。そっちの方が変じゃねえのか？大体何だよ敬語って！」
「はあっ？」
俺と少女の間に気まずい空気が流れはじめた。
「あ、あの、私たち大学の写真サークルに所属している者同士で……」
すると横から瑞希がフォローをしてくれた。
「ほらぁ。やっぱり私より年下じゃないの〜」
……
「ええっ！」
俺は思わず身を乗り出して絶叫してしまった。
俺らより、年上！

六

この少女、いや、この女性の名は飯橋寛子（いいはしひろこ）。二十三歳で俺たちより三つも年上であった。何でも大学を卒業してからプロの写真家を目指すため、東京の専門学校に通っているそうである。水崎に来た理由は、俺たちと同じく撮影のためだそうだ。

「へぇ～、東京ってスゴいんですね。私まだ行ったことないんですよ～。ディズニーランドとか行ってみたいです」

しかもこの女性、偶然にも瑞希と同じＨＰをみて水崎湖にやってきたようで、そこから何故か瑞希と意気投合してしまった。今、俺の目の前を二人並んで談笑しながら歩いている。

「ネズミーランドは厳密には東京じゃないけど、そーなんだ。カレシと一緒に行けばいいじゃん」

「あ～、え～っと、壮介君テーマパークとかあんまり好きじゃなくて行かないんです」

瑞希が後ろの俺を意識しながら応えた。

「え～、何で何で？」

「高所恐怖症で、絶叫マシーンが乗れないんです」

「え～、なっさけね～の」

女性は振り返り、蔑んだ目で俺を見てきた。

「な、何だよその目は！　しゃーねーだろ、怖いモンは怖いんだよ！」

「そこでカノジョのために身体張るのがカレシってもんでしょ。強面の割りに甲斐性ないわね。」

「う、うるせーよ！」

クソ、何で初対面の人間にここまで言われなきゃいけないんだよ。とは言っても、俺が高所恐怖症で、遊園地やテーマパークが苦手というのは本当である。瑞希もそんな俺に気をつかっているのかは定かではないが、今までそういう場所に行きたいと言ったことは一度もない。だから俺も強く言い返すことはできなかった。悔しいけど……。

「そんなことないですよ、寛子さん。壮介君は見た目はぶっきらぼうな感じだけど、実際は優しい人なんですよ」
何だか視点がずれているような気もするが、劣勢に立たされている俺に一応のフォローを入れてくれた。
「優しい？　ふぅ～ん。どんなところが？」
「どんな、ところ……」
瑞希は考え込んでしまった。そこは黙るところじゃない！
「どんなところ？」
「……例えば」
瑞希は何故か恥ずかしそうな表情になった。……おいおい。
「夜、二人になった時に……」
だーっ！
「何を暴露しようとしとるんじゃお前はーっ！」
「キャッ」
「アッハハハハ～」
こんなカンジで、俺たちと飯橋寛子という名の女性は次第に親交（？）を深めていくのであった。

第二章　惨劇のはじまり

一

「今晩、私の泊ってる所に来なよ」
あの後、しばらく俺たちは飯橋と一緒に撮影を行った。そして日が沈みかけ、宿に戻ることになった俺たちにそう誘ってきたのだった。
俺はどっちでもよかったのだが（というか、面倒くさいのであんまり行きたくはなかったが）、瑞希とは完全に「出来上がってしまった」ので、瑞希は行くと即答してしまったのだ。瑞希が行くと言えば俺も行かない訳にはいかない。俺のいない所で何を暴露するか判らないから……。
俺たちは一旦飯橋と別れ、「しまだ」へと帰ってきた。
「あ、お帰りなさいませ」
玄関先で女将さんと出会い、俺たちは挨拶を交わした。
「夕食は六時頃でよろしいですか？」
「あ、はい。お願いします。それと、夕食の後また出かけてきます」
俺は女将さんにそう伝えた。
「どこかお出かけになられるのですか？　夜の湖畔は明かりが少ないので気をつけて下さいね」
「ありがとうございます。ちょっと知り合いが泊っているペンションへ行こうと思ってまして」
「へぇ、どちらの方へ？」
瑞希は別れ際に飯橋から受け取ったメモを取り出した。
「ペンション　うらら」
メモにはペンションの名前と、手書きの簡単な地図が描かれていた。
「うららさんですか。それなら前の道を右に出て真っ直ぐですね。

ここから歩いて十五分程かかると思います」
女将さんは手振りを用いて俺たちに教えてくれた。
「それでは、部屋の方へご案内してもよろしいでしょうか？」
「はい、お願いします」
俺たちは部屋に行くため、女将さんの後をついていった。

夕食とお風呂を済ませた俺たちは、飯橋の泊っているペンションへと向かうことになった。俺は手ぶらで行くつもりだが、瑞希はデジカメやビデオカメラを持っていくようであった。飯橋と会ってからも、瑞希はビデオを撮っていた。それをみんなで鑑賞しようと考えているらしい。
出発前、玄関で瑞希を待つ俺は、食堂から出てきた女将さんと目があった。
「これから出かけられるのですか？」
「あ、はい。瑞希の準備が済み次第、向こうのペンションに行ってきます。そんな遅くならないうちには帰ってきます」
「判りました。一応の門限は十時ですので、よろしくお願いします」
瑞希が来るまでの間、俺と女将さんはしばし談笑していた。
「そういや女将さんは、うららってペンションはご存知なんですよね」
実はまだ見ぬペンションの事が少し気になっていたので、女将さんに訊ねてみることにした。
「はい、存じております」
「どんなカンジの所なんですか？」
女将さんは少し間を入れた後、答えてくれた。
「そうですね。ペンションは今から二、三年程前に、元は民宿だった建物を改装してできたものです。以前は御夫婦で経営されていたのですが、旦那さんが事故で亡くなられてから、奥さんがお一人で切り盛りされているようです」
女性が一人でとはけっこう大変そうだな。あの飯橋って人、迷惑

かけてないだろうな？
その奥さんについて聞こうと思った時、食堂の方から声が聞こえてきた。
「智子～。ちょっと来てくれ～」
「はーい！　すみません。失礼します。」
女将さんは俺にお辞儀をして、食堂へ戻っていった。あの女将さん、智子さんって言うのか。後で瑞希にも教えておいてやろう。
すると、階段の方からバタバタと人が降りてくる音がしてきた。
「お待たせ」
瑞希がカバンを肩にかけて姿を現した。
「ホントに持って行くんだな……」
「うん。寛子さんも撮っちゃったし。一緒に観ようよ」
「はいはい。じゃ、行こうか」
俺は靴箱から靴を取り出して地面に投げた。瑞希は誰かを探しているかのようにキョロキョロしている。
「女将さんなら今仕事中だ。これから出かけるのは俺から言ってあるよ」
「そーなんだ。じゃ問題なしだね！」
そして瑞希も靴を履き、宿を出発した。
「なあなあ、女将さんの名前、智子っていうんだぜ。知ってたか？」
「うん、知ってるよ。予約の時に聞いたから」
ガーン……
夕闇の中、こんな他愛も無い話をしながら、俺たちはペンションへと向かった。

二

「ここみたいだな」
「しまだ」を出て歩いて十五分程、飯橋が書いた地図の通りの道を来た俺たちは、一軒のペンションにたどり着いた。建物自体は少

し古い感じがするが、周りの植え込み等は綺麗に剪定されていていた。
＜ＵＲＡＲＡ＞
鉄さびの浮いた門に、木製の看板が掲げられていた。間違いなく、ここのようであった。
「チャイム鳴らすね」
瑞希が塀に設置されていたチャイムを鳴らした。
キンコーン
ありきたりなチャイム音が2回鳴った。
しばらく間があって、門の奥に見える扉が動いた。
「はい……」
扉から一人の女性が顔を覗かせた。
「あ、こんにちは。私たち今日こちらに泊っている飯橋寛子さんに誘われて来た者なんですけれども」
瑞希が門に近付いてそう説明した。
すると、女性はニコッと笑い、扉を開けた。
「あなた方ですね、飯橋さんのお客さん。飯橋さんからお話は聞いております。どうぞ中へお入り下さい」
女性は門を開け、俺たちを中へ招き入れてくれた。
「どうも、はじめまして。私は岡本瑞希と申します。こっちが……」
「新谷壮介といいます」
瑞希が言う前に自分で言ってやった。
「こちらこそ、はじめまして。私はこのペンション「うらら」の世話人をしております田原加奈美（たはらかなみ）と申します」
世話人の女性、加奈美さんは再びニコッと笑い、俺たちにお辞儀をした。俺たちも合わせてお辞儀をした。
「ところで、飯橋は今どこにいるんすか？」
そういえば全然姿が見えない。
「飯橋さんは今入浴されております。飯橋さんより、入浴中にお見えになったら、部屋の方へ通しておくように聞いております」

そうして俺たちは飯橋の部屋へと案内された。その間、加奈美さんにこのペンションについて色々訊ねてみた。
このペンション「うらら」は二階建てになっており、一階はフロント・食堂・リビング・トイレ・浴室、そして世話人の居室。二階は客室と倉庫、トイレになっているそうである。
「こちらです。どうぞ」
俺たちは客室の一つに到着し、扉を開けた。
室内は１０畳程の洋室で、ベッドが二つにテレビとテーブル・イス、クローゼットが設置されている。
「では、ごゆっくり」
程なくして加奈美さんは部屋を後にした。
「へ～、見た目は少し古かったけど、部屋はけっこうキレイなんだな」
「そうだね」
俺は二つのベッドのうち、きちんとベッドメイクされた方（もう一つは掛け布団がクチャクチャになっていた。飯橋が使っているのだろう。）に座り、部屋を見渡した。
「ん？」
部屋を見渡していて、ある場所に少し違和感を感じた。それはクローゼットが設置されている壁であった。瑞希も気付いたのか、俺と同じ方向を見ていた。
俺はベッドから腰を上げ、クローゼット側へと近付いていった。そして違和感を感じた場所を凝視してみた。
「なんじゃこりゃ」
俺は思わず声を上げた。
クローゼットが設置されてある壁の隅、天井から下に３０センチ四方に壁面がそこだけ途切れていた。
つまり壁に穴が空いているのである。
「何だろうこれ、手抜き工事かな？」
あまりに奇妙な光景に瑞希も首をかしげた。

その時、部屋に向かってくる足音が聞こえた。
「あ～、お待たせ～」
ドアが開き、飯橋が濡れた頭で姿を現した。
「すみません、先にお邪魔しちゃって」
「いいの、いいの、気にしないで。それで……」
飯橋は部屋を見渡し、最後の俺の方を向いた。
「しっかし、人の部屋でお盛んなことで。若いっていいわね～」
苦笑いというか、わけのわからない視線を俺に向けてきた。
「はぁ、何がだよ」
「これよ、こーれ」
飯橋は掛け布団がくちゃくちゃになっているベッドを指差した。
「早くしけ込みたいのは判るけど、別に今夜ここに泊れって言っているわけじゃないんだから、もう少しガマンできなかったの～ん」
ニヤニヤしながら俺の脇をつついてきた。
……ここははっきり言っておこう。
「アホか！」
耳元で思いっきり言ってやった。
「ちょっと～。耳がおかしくなるでしょ！」
「しょーもない事を言ってるからだ。大体俺たちが来るのが判っているなら片付けとかんかい！」
「え～、ちょっとしたジョークじゃないの。それに早くしけ込みたいってのは満更でもないんでしょ」
そ、それは……。
「さあ、どーなの？はっきりしちゃいなさいよ」
今度は鋭い視線で俺の脇をつついてきた。何で俺は責められているんだ。
「あ、あのっ」
瑞希が俺たちの間に入ってきた。いたたまれなくなったのだろう。
「そ、そうなの？　壮介君」
赤面した瑞希が、俺の方をじーっと見つめていた。

瑞希さん、突っ込む所が違います……。

三

「ところで、あの穴は一体何なんだ？」
あの後、二人の追及（？）を何とかかわした俺は、「話題を変える」という事もあり、壁の穴について訊ねてみた。
「ああ、あれね」
ベッドに座っていた飯橋は立ち上がりクローゼットを開けた。
「じゃーん」
飯橋はクローゼットの中から一枚のベニヤ板を取り出した。
「何ですか、それ？」
俺が言う前に瑞希が訊ねていた。
「板よ」
そのまんまであった。
「見たら判るよ。そのベニヤが一体何なんだって聞いてるんだ」
すると飯橋はその板を俺の元へ持ってきた。
「ほら、ここよく見なさいよ」
飯橋はベニヤ板の端を指差した。そこには小さな穴が空いていた。
「ネジ穴？」
「瑞希ちゃん、ご名答」
よく見ると、小さな穴はベニヤ板の四方四隅に空いていた。
「元々はこれで穴を塞いでいたの。加奈美さんの話じゃ、加奈美さんがここへ来る前からこの状態だったみたい。何でも雨漏りでこの部分に大きなシミができたから、ペンションのオーナーが切り取ってしまったんだって」
よく見ると、天井部に幾つかのシミが確認できた。
「じゃ、寛子さんが板を外してしまったんですか？」
「うん」
何の悪びれもなく即答しやがった。

「アホか。勝手に部屋をいじくるんじゃねーよ」
「だって、ここだけ色が違って気になって眠れなかったんだもん。偶然カバンの中にドライバーが入ってたから、思い切って外しちゃったの」
何で偶然ドライバーなんか入っているんだ。
「てゆーか、さっきからアホアホうるさい！　ほら、カノジョからもしっかり躾しといて」
「す、すみません」
瑞希は俺をチラッと見た後、申し訳なさそうに言った。俺の保護者かい……。
「別に瑞希ちゃんが誤る事じゃないのよ～。ところで例のブツ持ってきてくれた？」
「あ、はい！」
瑞希はカバンの中からビデオカメラを取り出した。
「ああ、ホントに観るのね」
二人の雰囲気を見るに、どうやらビデオカメラの件は飯橋の差し金だったようである。瑞希はカバンの中からコードも取り出し、テレビの前に座りこんだ。
「できるか？」
俺も瑞希の隣りに座った。
「ヒューヒュー、お二人さんお熱いねぇ」
「めちゃ古いリアクションだからな、それ」
後ろで冷やかす飯橋という名の「おばさん」に静かに突っ込んでやった。
「これでいいかな？」
「テレビを外部出力にして、再生ボタン押してみ」
すると、真っ暗だった画面が一転して明るくなり、
『おもいでづくり～』
俺の姿が画面に映し出された。そして……、
『フフフ、フレンチキ～ス』

……。
「あんたたち、もしかしてバカップル？」
「……」
言い返せなかった。
その後、映像の中は飯橋も加わり、俺と飯橋が交互に映し出されていった。俺は撮影している姿。飯橋は瑞希とふざけ合っている姿であった（肝心の水崎湖の風景は殆ど無い）。でも心なしか、俺が映し出されている場面が多い。
「な～んか、私お邪魔虫みたい」
できればもう少し早く気付いてほしかった。まあ、瑞希の「おもいでづくり」のひとつになれば、それはそれでいいのだが。
「別に、そんなことないですよ。寛子さんとも、すごく楽しかったです」
瑞希が笑顔でそうフォローを入れた。
「え～、でもこんなの見せ付けられちゃね～」
そう言って、飯橋はビデオカメラの巻き戻しボタンを押した。
停止ボタンを押した次の瞬間、
『フフフ、フレンチキ～ス』
親に見せられないようなバカップル映像が映し出されていた。
「あれ？」
何を思ったのか、飯橋は再び巻き戻しボタンを押して、さっきの映像をリプレイした。
「何だよ、もういーだろ。判ったよ、バカップルでいいよ！」
「寛子さん、あんまり観られると恥ずかしいです……」
さすがに瑞希もたまらなくなったようだ。飯橋の手を止めようとした。
「ちょ、ちょっと待って、違うの！」
飯橋の思わぬ真面目な声に俺たちは顔を合わせた。
「お、おいどうしたんだよ？」
すると飯橋は再び映像をリプレイして、

「ちょっと、ここ観てて」
一時停止した映像、ちょうど俺が瑞希にキスされた時、俺の背後に映り込んでいた廃屋を指差した。
「いくよ」
緊張感漂う声で言い、再生ボタンを押した。
……
「えっ」　「あっ」
俺と瑞希は同時に声を上げた。俺の後ろに映り込んだ廃屋に、一瞬ではあるが黒い影が横切ったのである。
「まだよ。よーく観てて」
問題の廃屋は一旦俺の身体で隠れてしまう。そして十秒程して再び画面に映り込む。
「……！」
俺は息を飲んだ。
廃屋の中で、影が動いていた。それも激しく。この影がもし「人間」ならば、まるで腕を上下させているような動きだった。
「何なんだよ。これ？」
廃屋の中で蠢く不可解な影。何とも不気味な映像であった。
俺は瑞希の方を覗いてみた。その表情は強張っていた。
「な、何なのこれ？　もしかして幽霊！？」
瑞希が不安気な声で俺に訊ねてきた。俺は基本的に幽霊の類は信じない方だが、自分の映っている映像にこんな不気味な影が映っていると、そう思ってしまいたくなる。
「知らねーよ。な、何か目の錯覚とかじゃねえの？」
俺は瑞希を少しでも安心させようと強がってみせた。
「どうかな……。映像はけっこう動いたりブレたりしているけど、この影はそれに関係なく独立して動いているよ」
俺も薄々感じていたことを、飯橋が声に出してくれた。
「じゃ、じゃあこれは何だってんだよ！」
すると飯橋は意外と冷静……というか薄く笑みを漏らしていた。

「そうカリカリしな～い。現段階では私にも何が何だか判らない。それはあなたたちと同じ」
そして飯橋はビデオを停止し、テレビは黒一色となった。
「でも、このまま判らないままでいるのは、と～っても気持ち悪いでしょ？」
俺と瑞希は頷いた。それと同時に、とても嫌な予感がした。
「だから、確かめに行きましょ！」
「嫌だっ！」
部屋に瑞希の絶叫が響き渡った。
一つ確信を持てたことがある。
飯橋寛子は、空気が読めない。

四

瑞希の「おもいでづくり」のビデオに映っていた不可解な「影」。飯橋の発案の元、俺たちは再びあの廃屋があった場所に行ってみることになった。といっても、こんな夜遅くではなく明日朝イチに出発することになった。ホントの所、飯橋はすぐにでも確かめに行きたかったようだが、ビデオを見終わった時点で八時をまわっており、外灯の少ない遊歩道を行くのは危険なため、俺が説得して飯橋の好奇心を何とか押さえつけた。
「おい、瑞希。あんまり気にするなって」
「うらら」からの帰り道、瑞希は口を真一文字に結び、俺の腕にぴったりくっついて歩いていた。
「うらら」を出発してから一言も口を開いていない。よほど怖いのか。それとも飯橋を止められなかった俺に対して怒っているのか。どっちにしろ瑞希が所謂心霊系を苦手にしているというのは意外であった。因みに持ってきたカバンは持っていない。飯橋がビデオをもっとチェックしたいと言い、ビデオカメラごと「うらら」に置いてきたのだ。

「壮介君……」
民宿「しまだ」の看板が見えてきた頃、小さな声で俺の名前を呼んだ。顔を横に向けると、とても不安そうな表情で俺をみつめていた。
「大丈夫だって。きっと何ともねーよ」
正直、俺もあの映像を観た時はビビッてしまった。でも、目の前に不安に駆られるカノジョがいるのに、情けない顔はできない。俺は笑顔で瑞希の目を見返してやった。
「俺がついているだろ」
瑞希の即頭部に自分の頭をコツンと当てた。
「……痛い」
「もっとひねったリアクションはねーのか？」
俺は苦笑いを浮かべ、今度は頭をくっつけてやった。
「そんなシケた顔してんなよ、アホ」
「アホじゃないもん」
瑞希はスネたような声で返し、ソッポを向いた。でも腕は離さないままだった。
そして「しまだ」の前に到着した時、瑞希の足が止まった。
「どうした？」
すると瑞希はソッポを向いたまま……。
「壮介君のせいだからね」
ポツリと言った。そして続けた。
「壮介君がきっぱり断ってくれなかったから、行かなきゃいけなくなったんだ。もし私に何かあったら……」
そして瑞希は俺の方に向いた。その表情は真剣だった。
「きっちり責任、取ってもらうからね！」
よく見ると、目尻には光るモノがあった。半ベソ状態だ。ここだけ見たらあらぬ誤解をされそうなやり取りであった。
俺は思わず可笑しくなり、吹き出してしまった。
「ちょ、ちょっとぉ！」

瑞希は頬を膨らませた。そんな顔を横目に俺は玄関の中へ入っていった。
そして靴を脱いで上がる際、後ろでふて腐れている、俺のカノジョに言った。
「ああ、絶対守ってやるよ。泣くなよアーホ」
少し照れくさくてこんなカンジになってしまったが、瑞希を守るという気持ちは誰にも負けないつもりである。絶対に危険な目には遭わせない。俺はそう誓った。

五

朝六時、俺と瑞希は水崎湖の遊歩道入り口に立っていた。さすがにこの地方のこの時間帯はひんやりとしており、半そででは肌寒く感じる。まだ朝は早いので、人気は殆んど無い（といっても、昼間は賑やかというわけではない）。犬の散歩をしている人がいるようで、遠くで犬の鳴き声が聞こえる程度である。
「あ～、ごめ～ん。おまたせー」
俺たちが遊歩道の入り口に来てから遅れること十分。飯橋が寝癖頭のまま姿を現した。
「言いだしっぺが寝坊してるんじゃない、アホ！」
昨晩、アレだけ嫌がっていたのにも関わらず、約束したからにはと早起きしていた瑞希の不満顔に応えて、激しく突っ込みを入れておいた。
「いや～。ビデオを何回も繰り返し観ていたら、いつの間にか日付が変わっちゃってね」
飯橋は申し訳なさそうに寝癖頭を掻いた。
「それにしても、昨日あれだけ嫌がってた割に、けっこう律義なのね」
「当たり前だ。俺たち約束は必ず守る」
「ふ～ん、俺たちねぇ」

飯橋は何かの意味を含んだ言い回しを使い、そしてニヤッと笑った。
あの不可解な影が映っていた場面。それは……。
「はいはい、どうせ俺たちはバカップルですよ。さっさと行くぞ。独り身女」
俺は飯橋に背を向け遊歩道へと入っていった。その後ろに瑞希も続いた。
「あ～、言ったなー！」
はったりで言ったのだが、どうやら図星だったようである。
俺は後ろでマジに毒づく飯橋を無視して、遊歩道を歩いた。好奇心が無いと言えば嘘になる。でも何より早く瑞希の不安を解消してやりたかった。
俺と瑞希は無言で歩いた。早朝の湖畔、聞こえるのは飯橋の毒と犬の鳴き声だけであった。

七

「何か、凄く吠えているね」
瑞希が口を開いたのは遊歩道に入って二十分程。廃屋がちらほら目に付いてきた頃であった。ここから問題の廃屋まで貸しボート屋を過ぎて十分もかからないであろう。そんな時であった。
俺も犬の鳴き声はけっこう前から気付いていたが、近くに犬の散歩をしている人がいるのだろうと思っていたが、泣き声は一向に止む気配は見せず。むしろその声は大きくなってきているようであった。鳴き声の感じは、じゃれあっている時の楽しそうな声でなく、まるで威嚇をしているような声であった。
「どこで吠えているだろ？　だんだん大きくなってきているね」
「ていうか、俺たちが鳴き声の元に近付いているような気がするよ」
俺は瑞希たちを横目に応えた。事実、一歩一歩進む度に、鳴き声が大きくなっているような気がした。

「壮介君……」
瑞希が俺の腕を掴んだ。顔を覗くと、昨晩のような不安気な表情だった。俺は瑞希の手を握ってやった。
それから二、三歩いて、貸しボート屋の屋根が見えてきた頃、
「あれ、吠えなくなった？」
飯橋はポツリと言った。急に犬の声が止んだ。
「犬、どっか行っちまったみたいだな」
もしからしたら、飼い犬の散歩ではなく、野犬同士の喧嘩だったのだろうか。そんな思いを巡らせながら、貸しボート屋の前を通り過ぎようとした時であった。

「ギャーッ！」

遠くで叫び声が聞こえた。それと同時に犬の激しい鳴き声が再び聞こえ出した。
「行ってみよう！」
言うよりも先に、俺は走り出していた。その後に飯橋と瑞希が続いた。
「あそこ！」
飯橋が道の真ん中でへたり込んでいる女性を発見した。
俺たちはその女性の下へ駆け寄った。
「どうしたんです？」
すると女性は震える手で犬の鳴き声がする先を指差した。
「ちょっと、ここ……」
飯橋が俺の肩を掴んだ。そして瑞希も俺の身に隠れ地面にへたり込んだ。俺たちの視線の先にあるもの、それはビデオに不可解な影が映り込んでいた問題の廃屋であった。その奥から、犬の鳴き声が途切れなく続いていた。
俺は一度深呼吸をして、意を決した。
「行くぞ」

俺はそう言い、一歩前に踏み出した。
「壮介君！」
瑞希が俺の身体を引っ張った。
「大丈夫だ。お前はここで待ってろ。飯橋、瑞希を頼んだぞ！」
へたり込んでしまった瑞希を飯橋に任せ、俺は廃屋へと近付いていった。けたたましい鳴き声の元に近付いていくにつれ、これはただ事ではないということを確信していった。
崩れかけた玄関をくぐり、鳴き声に導かれるまま短い廊下を抜け、かつてリビングであったと思われる部屋に出た。
そこには一匹の柴犬がいた。身を縮め、まさに威嚇するような体勢で吠え続けていた。
俺は犬の視線の先を追った。
そこには……。
「！」
俺はあまりの衝撃に言葉が出なかった。
そこには顔が判らない程に頭を割られ、血塗れになった無惨な死体が転がっていたのである。

第三章　鬼の一族

一

廃屋で死体を発見した俺たちは、悲鳴を聞きつけてやってきた貸しボート屋のオーナーに頼み、ボート屋の電話から警察に通報してもらった。俺たちも一応ケータイは持っていたが、電波が届かなかった。

第一発見者はかなり興奮していたが、既に聴取を終えて帰宅している。俺たちだが、瑞希はあまりのショックにパニックを起こしてしまったため、「しまだ」へ戻り警察から事情聴取を受けることとなった。

俺と飯橋は「しまだ」の一階にある談話室のソファに並んで座った。しばらくして一人の私服刑事と数人の制服警官が入ってきた。

私服刑事はこの事件を担当する事になった県警の坂という四十代と思われる刑事。聴取は、ドラマであるような警察手帳の提示からはじまった。

「え～、まず君たちの名前と住所を」

俺と飯橋はそれぞれ自らの身分を答えた。瑞希については俺が代わりに話すことにした。瑞希は現在部屋で休んでいる。

坂刑事は俺たちの話した事を手帳に書き記していった。筆が止る度に次の質問がかけられていった。

「え～と、君たちは第一発見者の女性の悲鳴を聞いて、あの廃屋に行ったと。で、新谷君が中に入って遺体を確認したと。ところで、君たちは何でこんな朝早くに遊歩道へ出ていたんだ？あんな何もないところ……」

ボート屋のおやじが聞いたらブチ切れそうな一言だが、やはり避けては通れない。ビデオの話をしなければ。俺はその事を話すために少し前かがみになった。

その時、
「あのっ」
飯橋が俺を遮るように声を発した。
「さっきも話したけど、私もこの二人も写真が趣味で水崎湖に撮影旅行に来ました。昨日の昼に出会って、カメラの話で意気投合して、今日の朝に一緒に撮影しようって、私が誘ったんです。私、ちょっと前から水崎に来ていて、朝の湖畔の少しモヤのかかった風景がステキだなって思っていたんです。それで、誘ったんです。そしたら、こんなことになって……」
飯橋は俺の存在をかき消すかのように、時に語気を上げ矢継ぎ早に言葉を発していった。俺の入るスキもなかった。
「ふん、ふん」
坂刑事は頷きながら手帳に視線を移し、筆を走らせた。
コツン
飯橋が不意に自分の足で俺の足を蹴った。
俺が飯橋の方を向くと、飯橋は物凄い眼力で俺に「何か」を訴えかけてきた。
「飯橋さんはそういう事ね。新谷君の方は？　それで間違いない？」
本当は昨日撮影したビデオに、あの廃屋の中に不可解な影が映っていて、それを確かめるために早朝から出ていたのだが、俺は飯橋の言い知れぬ無言の圧力により、
「間違いないです」
と答えるしかなかった。

二

「もう、落ち着いたよ」
飯橋が二階から降りてきた。聴取が終わった俺は、一階談話室のソファに座ってＴＶに映るニュース映像を眺めていた。
「ああ、悪いな」

俺たちが「しまだ」に戻ってきた時、瑞希は一人で立っていることもできないような状況であったが、俺と飯橋が聴取を受けている間に少し休んで落ち着いたようで、今は飯橋が様子を見に行くと言って二階へ上がっていたのだった。

〈え～、今新しい情報が入りました〉

ニュース番組のアナウンサーがそう告げたのを聞くと、俺と飯橋はＴＶに向き直った。

〈県警からの発表です。被害者の身元が判明しました。被害者の名前はＸ県県議会議員、桂城博敏（かつらしろひろとし）さん五十五歳。繰り返します。被害者の名前は桂城博敏さんです。尚、死因は頭部を殴打されたことによる頭蓋骨骨折と脳挫傷で……〉

俺はふと振り向いた。そこには「しまだ」の経営者家族がいたのだが、彼らの表情は何ともいえないようなものであった。確かに近所でこんな事件があったのだ。不安がったり、気味悪がったりするだろう。しかし俺が彼らから感じたものはそういう類のものではない。何かとてつもなく恐ろしい「怪物」を目の当たりにしたような、この場には少々場違いな空気であった。

「あの……」

俺が声をかけようとすると、みんな我に返ったようになり、厨房や食堂など散り散りになっていった。

「どうしたんだよ、みんな」

不可解な反応に、俺は意味もわからずそうボヤくしかなかった。

「あ、そういや」

俺はあることを思い出した。それは俺と飯橋が坂刑事から事情聴取を受けている時のことであった。

「あんた、何で話さなかったんだ？　ビデオの事」

「あ～ん」

あの時、俺たちが廃屋に行ったのは、前日に撮影したビデオに不可解な影が映っていて、それが何かを確かめるためにであった。しかし聴取の際、飯橋は俺が言う前に「朝の湖を撮影するために遊歩

道を歩いていた」と証言したのであった。その後、俺をじっと見てきたので、空気を読んで俺も飯橋にあわせることにしたのであった。
「何であんな事言ったんだよ。バレたらヤバいぞ」
すると飯橋は、
「ああ、その件ね」
俺の横に立っていた飯橋は俺の横に座った。俺が座っているソファは二人がけだが、二人座るとけっこう窮屈に感じる。
「あれはね、瑞希ちゃんのお願いなの」
「瑞希の？」
あ、あいつ……まさか。
「その顔は察しがついたってカンジだね。さすがカレシだ。やっぱ最愛のカレシがくれたモノは大切にしておきたいものよね～」
飯橋が茶化すように俺の脇をつついてきた。
あのビデオには廃屋の不可解な影を映し出している。それが警察に知れれば、当然手がかりとして押収される。その後はいつ手元に戻ってくるかわからない。もしかしたら、二度と戻ってこないかもしれない。瑞希はそのことがとても不安だったのだろう。あいつは俺があげたものはとにかく大事にするのである。だから、警察には知られたくはなかったのだろう。そして飯橋はその瑞希の気持ちを汲んでくれて、けっこう危険な橋を渡ってくれたようだった。
「ビデオは今私の部屋にあるわ。さすがに警察も私の方に踏み込んでくることはないでしょうよ」
そう言って飯橋は薄っぺらい胸を張った。

ゴチン！

頭突きをされた。
……やはり俺は考えている事が顔にでてしまうようだった。
「ところで、警察は？」
「もう帰ったよ。俺たちの聴取が終わった後、宿の人にも色々話を

聞いていたみたいだけど」
ただ、談話室の窓から制服警官が通り過ぎるのが時折みられた。どうやらこの近辺で聞き込みを行っているようであった。聞き込みは捜査の基本だ。
「じゃあ、私たちは一応解放されたわけね」
「一応そうなるな。少なくとも俺たちは犯人じゃないからな」
すると飯橋は席を立った。
「じゃあさ、一度「うらら」に戻りたいんだけど、あんたも来ない？　ビデオも持っていってほしいし」
そうだった。瑞希のビデオカメラは飯橋の部屋に置いたままなのだ。瑞希が大事にしている物だ。持って帰ってきたら、瑞希も少しは安心するだろう。
俺は先に談話室から出て行った飯橋を追って談話室を後にした。

TVはつけっぱなしだった

〈……関係者の話によりますと、昨日桂城博敏さんは甥にあたる桂城好太郎さんと一緒にでかけたまま行方不明となっていました。尚、県警は桂城好太郎（こうたろう）さんの行方も依然判っておらず、好太郎さんが今回の事件について何らかの事情を知っているものとみて、行方を追っています……〉

三

ブロロロ……
「うらら」へ向かう俺たちの横をパトカーが通り過ぎていった。
さっきは自転車に乗った征服警官ともすれ違った。普段は静かな湖畔の町は、事件によって警察が巡回する物々しい雰囲気となっていた。
「ねえ、アンタ」

飯橋が不意に話しかけてきた。
「アホ、いい加減名前で呼べよ」
「アホって言うな。ちゃんと覚えてるからいいでしょ」
そういう問題ではないが、話を聞いてみることにした。
「アンタが死体を見つけた時、瑞希ちゃんがパニックになっちゃったじゃない」
「ああ」
俺が死体を見つけた時、外から瑞希の悲鳴が聞こえてきた。飯橋の話によると、第一発見者の女性が中の様子を、事もあろうに「けっこう具体的に」話してくれたそうで、それを聞いた瑞希はかねてからの不安もありパニックを起こし、泣きながらへたり込んでしまった。その悲鳴を聞いた俺はすぐに廃屋から出て瑞希を介抱し、ボート屋の主人に通報してもらってから「しまだ」へと連れ帰ったのだった。
「実はね、アンタが瑞希ちゃんを介抱している間に、私も廃屋の中へ入ってみたの」
それは初耳。俺も瑞希の介抱に必死だったから全然気付かなかった。
「それでね、ちょっと怖かったけど、死体を色々調べてみたの」
……この人、意外に肝が据わっているのだろうか。それともただの馬鹿なのか。
「どうやら失礼な事を考えているみたいだけど、話を進めるわよ」
飯橋は超能力でも持っているのだろうか？
「死因だけど、ニュースでも言ってた通り、頭部殴打によるものね。脳みそが飛び出しているんじゃないかってくらいボッコボコにされているわ。あと、頭を殴られるのを防ぐためだろうと思うけど、両手も骨折してるみたいだった」
つまり、犯人は頭を手で覆って逃れようとする被害者を執拗に殴り続けたということ。はっきり言って、正気の沙汰じゃない。
「あと、もう一つ気になることがあったの。これもニュースで言っ

てなかったけれど、頭部の傷の他に、死体の足にナイフみたいな鋭利なもので刺されたような傷があったの」
「刺し傷？」
あの時俺は惨たらしい姿となった頭部に気を取られていて全く気付かなかった。
「私はこう思うの。犯人は被害者の足をナイフで刺し、被害者が怯んだ所で頭部を殴打した」
いつの間にか飯橋の口調が探偵気取りなものになっていた。
「どう？　私の推理」
こんな状況下で、気取った態度をするこの顔は、ちょっとムカつく。
「アーホ。死体の状況をなぞっただけじゃねーか。全然推理になってねーよ。それだけで犯人の手がかりが掴めんのかよ」
「いやぁ、それはまだわからないけど……」
飯橋は俺の口調に空気を読んだのか、苦笑いしながら頭を掻いた。
「……人が殺されて、瑞希があんな事になってしまったんだ。少しは自重してくれよ」
俺は正直苛立っていた。何より、この旅行をとても楽しみにしていた瑞希のことを考えると、気の毒であり、申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
「はは……、ゴメン」
「頼むぜ、ねえさん」
その後、大した会話もせず「うらら」の前に到着した。
「あれ？　加奈美さん」
玄関の所に世話人の加奈美さんがいた。
そして……、
ササッ
加奈美さんの横で一瞬影が動いた。よく見ると、小学生くらいの男の子が加奈美さんの後ろに隠れていた。
「お子さんですか？」

すると加奈美さんは苦笑いをした。
「はい、息子の蓮です。とても恥かしがり屋さんなのです」
「へぇ。こんにち……」
ダッ　　バタン！
俺が挨拶を言い終わる前に、中へと入ってしまった。
「すみません。実はうちの子、生まれつき身体が弱くて学校へはずっと通えていないのです。だから私以外の人と関わることが殆んどなくて、私以外の人に対してとても警戒してしまうのです。ごめんなさい。どうか気分を悪くしないでください」
加奈美さんは申し訳なさそうに、深々と頭を下げた。
「いえいえ、俺は全然大丈夫ですよ」
「そうですよ加奈美さん。でも、蓮君と外で会うのは初めてかな？お散歩でもしてたのですか？」
「はい、日課なんです。うちの子は中にいることが多いので、お散歩して少しでも体力をつけたいと思ってしているんです」
加奈美さんはとても優しい表情で話してくれた。これが所謂「母の顔」なのだろうか。何だがほほえましい表情であった。
「でも、こんな時に散歩なんて、気をつけてくださいね」
「ありがとう飯橋さん。こんな静かな所であんな事件があるなんて。私もびっくりしました。寛子さんたちも気をつけてくださいね」
「私たちは大丈夫ですよ。なんたって、こっちには屈強な男子がいるんですから！」
屈強っても俺は別にスポーツや格闘技を習ったことはない。ごく普通の大学生だ。
「俺は逃げるぞ。お前を囮にして逃げる」
「なんですって〜！」
飯橋は顔を赤くして、けっこうマジで怒った。そして俺に裏拳を見舞ってきたが俺はかるく受け流した。ていうか、絶対飯橋の方が強いと思う。
そんなやり取りをしていると、一台のパトカーが「うらら」の前

を通り過ぎようとしていた。窓が開いているようで「うらら」に近付いてくるにつれて、車内での無線のやり取りが俺たちの耳に入ってきた。
「ガガガッ……全車至急急行せよ。繰り返す、水崎湖ボート屋付近で男性の変死体を発見。全車至急急行せよ……」
パトカーは「うらら」の前を通り過ぎた直後にサイレンを鳴らしスピードを上げて走り去っていった。
俺と飯橋は顔を見合わせた。そして喉の音が聞こえるくらいに息を飲んだ……。

四

夜

夕食を終えた俺は一階談話室で瑞希と一緒にいた。俺が「しまだ」に戻ってくると瑞希が出迎えてくれた。本人に調子はどうかと訊ねると、「もう大丈夫」と笑顔で応えてくれた。
俺たちは談話室のソファに座りＴＶに向かっていた。瑞希は少し疲れているようで、俺の肩に身体を寄りかけていた。
〈続きましてニュースです。今朝Ｘ県水崎町で遺体となって発見された桂城博敏さんと一緒に行動していたと思われる、Ｘ県在住の桂城好太郎さんが今日の午後、水崎町の水崎湖で遺体となって発見されました。桂城好太郎さんの身体には十数箇所の刺し傷があり、県警は桂城博敏さん殺害と何らかの関連があるものとして捜査にあたっています〉
あの時、「うらら」の前でパトカー無線で聞いた情報により、俺と飯橋はパトカーを追ってボート屋へ向かった。到着するとパトカーが何台も停車しており物々しい雰囲気であった。遠目に坂刑事がいるのを発見して目があったが、坂刑事は手で×サインを作り、奥へと消えていった。しばらくして救急車が到着し、遺体が乗っていると思われる担架を搬送していった。

「寛子さん、どこ行っちゃったんだろう」
ＴＶ画面を眺めながら瑞希がボソッと呟いた。実は遺体を搬送した救急車を見送った直後くらいから、飯橋が姿を消してしまったのである。その時俺も周辺を探し、「うらら」にも寄ってみたが帰っていないとのことであった。まあ、あいつのことだから大丈夫だと思うが、こんな事件が続いてしまった所だ。誰だって心配になってしまうものである。瑞希も自身の調子は回復しているが、そのことが気になってあまり元気がないのである。
「大丈夫だって」
俺は瑞希の肩を優しく抱いてやった。瑞希も俺の胸に顔を埋めてきた。
「失礼します」
ソファの後ろから声がした。振り向くと女将さんの智子さんがお盆を持って立っていた。
俺は立ち上がり会釈をした。
「お二人共、大変な一日でしたね」
智子さんはお盆に乗ったコーヒーをテーブルの上に置いた。
「しばらく滞在されるのですか？」
本来、俺たちは撮影が終了次第帰ることになっていた。しかしこのような事件が起こってしまい撮影どころではなくなってしまった。瑞希のこともあるし早々に引き上げたかったのだが、夕食前に坂刑事から連絡が入り、捜査のメドがつくまで水崎に残ってもらいたいとの要請があったのである。
「警察から言われたもんで……、スミマセンもうしばらく厄介になります」
因みにこの間の滞在費は警察が出してくれるとのことである。まあそうでなかったら無理矢理にでも帰っていたところだ。
「ところで智子さん。一つ質問していいですか？」
「はい？」
それは第一の殺人、桂城博敏についてのニュースを談話室で観て

いた時に感じたある違和感であった。
「最初の死体が発見された時のニュース、ここで一緒になって観ていたじゃないですか。その時の、宿の方々の雰囲気が、何か少しおかしかったっていうか……、凄く凍りついていたというか」
智子さんは俺の言葉に顔を強張らせた。するとおもむろに廊下に顔を出し、外の様子を確認してから、開け放たれていた談話室の扉を閉めた。
「座らしてもらってもよろしいですか？」
智子さんは俺たちの向かい側にあるソファに座った。
「私は名古屋出身で、水崎へは嫁いで初めてやってきたのです。だから主人や他の家人程敏感ではないのですが、殺された桂城家というのは、水崎町では少々曰くのある一族なのです」
「それってどういうことですか？」
俺は身を乗り出して訊ねていた。瑞希も身体を起こして智子さんの話に聞き入っていた。
「私も聞いた話なので詳しくはないのですが、この桂城家というのは、この水崎地方発祥の一族で県議会や市議会に議員を輩出している県内でも有数の旧家として知られています。ただ……」
ここから智子さんの歯切れが悪くなった。
「評判はあまり良くないみたいです。桂城家は終戦後急速に発展したのですが、その際かなり「強引な手段」を用いていたそうです。農地改革の折も、所有していた田畑や山林を殆んど没収されずに済んだようですし。それに……」
ここから智子さんの声が極端に小さくなった。
「これはあくまで言い伝えられている事で、本当かどうかは定かではないのですが、桂城家には昔から一族の中に事件を起こす人間が現れると言われているのです」
「事件！？」
智子さんの意外な言葉に俺は目を丸くした。その瞬間、瑞希が俺の腕をギュッと掴んできた。

「つまり、今回の事件でみんなが敏感になっているのは、その曰く付の桂城一族が関係しているからと」
「はい、そういうことになると思います。昔から水崎に住んでいる方は、一族の中に突如狂気に心を支配される人間が現れる桂城家のことを、鬼の一族として恐れているそうです」
鬼の一族。桂城家とはそんな曰くのある一族だったのか。俺は思わず瑞希の肩を抱き寄せた。瑞希は不安そうな表情で俺を見つめていた。

五

「あら」
談話室の窓越しに車のヘッドライトが見え、そしてそのヘッドライトは「しまだ」の敷地へと入ってきた。それを確認した智子さんは、客人が来たと思い、談話室から出て行った。俺は窓に近付き外の様子を伺った。車はこの静かな水崎には凡そ似つかわしくない黒塗りのベンツであった。
「何なんだあれ？」
俺が窓越しに外を伺っていると、一人の男性が車から出てきて玄関の方へ歩いていった。そして玄関の方で話し声が聞こえた後、談話室の方へパタパタと足音が近付いてきた。
「あ、あの」
扉が開くと智子さんが困惑した表情で俺たちを見てきた。その直後、
「ここか」
車から降りてきたと思われる男が、智子さんを押しのけて談話室へと入ってきた。男は三十代前半と思われるが、黒いダブルのスーツにオールバック。また目つきも鋭く、お世辞にも好青年という格好ではなく、どちらかというと「その筋の方」という感じだった。
この男の姿を見た瞬間、俺は瑞希の隣りに移動した。瑞希からは

警戒心がひしひしと伝わってきていた。
「お前らか、親父の死体見つけたんわ」
男は鋭い眼光で俺たちを睨みつけてきた。後ろでは智子さんが対応に困りオロオロしていた。
「そ、そうですけど」
俺も警戒心を強め、男に応えてやった。
……親父、ってことは、この男は廃屋で死んでいた男の息子なのか？
「わしは今朝死体で発見された桂城博敏の息子で桂城　博壱（ひろいち）っていうもんじゃ」
すると男は俺に右手を差し出してきた。握手のつもりなのだろうか。
俺は警戒心を解かずに右手を恐る恐る差し出し、男から差し出された手を握った。
ギュッ！
「！」
男は力いっぱい俺の手を握り締めてきた。物凄い力だ。
「そ、壮介君！」
俺の歪んだ表情で男の行動に気付いたのか、瑞希が思わず大声を上げた。
その瞬間男は俺の手を離した。
「ふん！　最近の若モンは随分と軟弱になったもんだな」
男はそう言うと、俺と瑞希に近付いてきた。俺は瑞希を後ろに下がらせようとした。
ズイッ
「瑞希！」
しかし瑞希は俺の思いに反して後ろへ下がろうとせず、更に俺の前に出ようとした。
「はっ、最近は女の子の方が強くなったんかいの」
瑞希は男をギッと睨みつけていた。男はそれに気付き不快そうに

一笑した。
そして男は俺たちの目の前までやってきた。
「わしも色々と忙しいんじゃ。手短に聞いとくぞ」
男はメンチを切るような感じで俺に顔を近づけてきた。
「お前らが親父の死体を見つけた時、何か変わった事はなかったか？」
俺と瑞希は顔を振らずに目を合わせた。そして俺は男を睨み返した。
「ないよ。あそこでの事は全部警察に話した。それ以上の事は何も知らない。気付いていない」
俺は少し震えた声で男に応えた。俺の言葉の後に瑞希も「何も知らない」と続いた。
「本当か、オラ」
男の俺を睨む目がさらに鋭くなった。俺も負けじと睨みかえした。
「本当だ！」
唾がかかりそうな勢いで更に言い返した。
そして一瞬の間があって、男が俺たちから離れ、身を翻した。そして舌打ちをして、談話室から出て行こうとした。
「もし何か隠していて、後で判ったら……ただじゃおかねえぞ。」
男はドスのきいた声で背中越しに凄み、そして智子さんを押しのけて部屋を後にした。智子さんは男の後を追っていった。しばらくして、表で車の走り去る音が聞こえた。
「な、何なのよあの人！」
緊張の糸が切れたのか、瑞希はソファにへたり込んだ。しかしその表情は不快感で溢れていた。
「壮介君、手、大丈夫？」
「ああ、別に何とも」
俺は瑞希の前で手をヒラヒラと振ってやった。
実際は、まだ少しジンジンしているが。
「あのオッサン、親父がどうのこうのって言ってたな。一体何だっ

てんだ！」
確か名前は桂城博壱って言っていたな……。本当にガラの悪い男であった。
「？」
瑞希が玄関の方を気にした。耳を済ませると、誰かの話し声が聞こえる。
パタパタパタ
すると談話室の方へ向かってくる足音が聞こえてきた。そして足音の主である智子さんが顔をだした。
「あ、あの」
何かさっきと同じような光景であった。
「どうしたんですか、またガラの悪いヤツが来たんですか？」
すると智子さんは申し訳なさそうな感じで苦笑いをした。俺にではなく、智子さんの後ろに。
「ガラが悪いとは失礼な！」
智子さんの後ろには飯橋が不機嫌そうな表情で立っていた。

六

「あ～ん、それは大変だったわね～、瑞希ちゃん」
飯橋はソファに座り、智子さんが淹れてくれたコーヒーを啜った。ていうか、俺は無視ですか。
「瑞希ちゃんの話を聞いただけだけど、さっき来たって男は今朝廃屋で発見された桂城博敏の息子である博壱で間違いないわ。ガラの悪い男だったでしょ？」
飯橋に事情を説明したのは殆んど俺なのだが、何故に俺の存在は無かった事にされているのだろうか……。
「いえ、私は別に。壮介君の方が大変だった。それより寛子さん、今までどこに行ってたんですか？」
そうだ、飯橋は昼に俺と湖畔に行ってから姿をくらましていたの

である。
「今まで何やってたんだこんな時に。けっこう心配していたんだぞ」
すると飯橋はこちらを振り向くと、コーヒーに少し口をつけた。
「あんた、まだいたの？」
……
「なあ、瑞希。このアホ殴って外に放りだしていいか」
今俺は本気で殺意を覚えた。
「まあまあ、壮介君。でも、寛子さんそれは本当なんです。私たち本当に寛子さんのこと心配していたんです」
瑞希は飯橋に食い入るように迫った。すると飯橋は苦笑いして頭をかいた。
「ハハハ。ジョーダンに決まってるでしょ。ゴメンゴメン。何も言わずに行っちゃったのは悪かったよ」
見たカンジはとても申し訳なさそうには見えないが、ここは瑞希の顔を立ててやる。
「で、どこに行ってたんだ？」
すると飯橋はニヤッと笑い持っていたリュックから手帳を取り出した。
「実はね。アンタと湖畔で第二の殺人を確認した後、私はこの事件について詳しく調べてみようと思ったの」
「はあっ！？」
俺は思わず声を上げた。瑞希も目を丸くしていた。
「なかなかのリアクションね。でも、それをアンタに言うと、瑞希ちゃんのこともあるから絶対に反対するでしょ。だから自分ひとりでやってみようと思ったの」
確かに、廃屋での一件で瑞希があんな事になってしまったから、薄っぺらい好奇心でこの一連の事件に首を突っ込みたくはない。関わりたくないというのが本心だ。それは瑞希も同じだろう。
「だ、だからって、一言も言わず勝手に行ってしまうことはないだろ」

「そ、そうですよ。心配しちゃいます」
物騒な事件が立て続けに起きているのだ。知っている人間が忽然と姿を消したら気が気でなくなる。
「それに関しては悪かったよ。ごめん、瑞希ちゃん」
やっぱり俺は無視ですか！？
「でも、調べるって何を調べていたのですか？」
「それなんだけどね。」
飯橋は持っている手帳をピラピラと開いた。
「まずあの廃屋の事なんだけど、あの廃屋の元は何だったかを調べてみたの。水崎湖界隈の人に聞いたところによると、昔は桂城家所有のお屋敷だったそうなの」
「桂城家？」
ということは、自分たちの所有する建物の中で殺されていたということなのか。
「あの辺りは桂城家が所有している土地や建物が点在しているんです」
振り返ると、智子さんがお菓子の乗ったお盆を手に談話室へ入ってきていた。瑞希が智子さんからお盆を受け取り会釈した。
「で、もう少し詳しく調べてみると、あの廃屋は五～六年程前まで人が住んでいたらしいの。名前は確か……」
「銀造さんですね」
飯橋が応える前に智子さんが応えてくれた。
「さっすが、地元！　よくご存知で。何でも桂城家の中でその人が一番最近まで水崎で生活していたんだって。他の一族はみんな都市部へ引越しちゃってる」
「そうですね。銀造さんは水崎湖をこよなく愛していらっしゃいましたから」
「で、今その銀造って人はどこに。もう亡くなったのか？」
「いや、今は隣村の老人ホームで余生を送っているの。実はね、私その銀造さんに会って話を聞こうと思って、その老人ホームへ行っ

てきたの」
何を考えているんだコイツは。いきなり行って会ってくれるわけが無いだろう。見回すと瑞希と智子さんは驚き半分呆れ半分というような感じであった。
「で、寛子さんは会えたのですか？」
瑞希の質問に、飯橋は手を振った。
「いいや残念ながら。一足違いで警察に先を越されて会えなかった。全く、田舎警察のクセに手が早いんだから」
お前も十分手が早いと思う。
「んで、次に調べたのが件の桂城家について。地元の方々には有名でも私たちには馴染みのないファミリーだからね」
飯橋はまた手に持っている手帳をピラピラと開いた。俺はそれを横目で覗いてみた。
真っ白だった。……っておい！
「雰囲気作りよ。空気読みなさいよ」
真面目な場でどうして雰囲気作りが必要なのだろうか。俺は思わず頭を抱えた。
「さて桂城家なんだけど、この水崎地方に古くから影響力を持っていた旧家っていうことは知っているわよね。事件の後なんかにＴＶでもさんざん言っていたし」
確かにＴＶでも観たし、智子さんからも話を聞いた。そう、「鬼の一族」である。
「まあ、影響力があったって言っても、あくまで水崎地方での話だから、所謂「田舎の金持ち」程度といえばそれまでだったの。そんな桂城家が終戦後県下にその名を轟かせることになるの。」
「龍造さんのことですね」
智子さんが俺たちの後ろで呟いた。
「その通り。かねてから豪腕で知られていた当時の一族当主桂城龍造は、終戦直後の動乱の中で様々な事業を展開。中にはけっこうヤバい商売もやっていたみたい。それに戦後の農地改革の際、一族所

有の農地や山林も殆んど没収されなかったっていうくらいだから、なかなかの豪腕よ」
俺は飯橋情報の真偽を確かめるため、後ろにいる智子さんに視線を送った。すると智子さんは静かに頷いた。どうやら本当の事らしい。
「桂城龍造は昭和四十年に亡くなったんだけど、その息子の桂城博造(はくぞう)も親父に負けず劣らずの豪腕だったらしく、親父の意志を引き継いで事業を拡大。県内において桂城一族の地位を不動の物にしたの。また政治への関心も高く、息子たちを議員にしたりもしたの」
「今朝遺体で発見された県議会議員の博敏さんは、博造さんの息子にあたります」
智子さんがそう付け加えた。飯橋は頷き、「何も書かれていない」手帳をめくった。
「その博造は二十年程前に亡くなっているわ。あと博造にはもう一人元市議会議員で博太郎(ひろたろう)という息子もいたんだけれど、これも数年前に亡くなっているわ」
飯橋は無駄にピラピラしていた手帳を閉じた。
「あと湖畔で発見された桂城好太郎は博太郎の息子。そしてさっきここへ殴りこんできていたのが桂城博敏の息子で博壱。他にも親戚はけっこう多いみたいね。なんせ県下屈指の旧家だものね」
飯橋は皮肉たっぷりな口調で言った。
「で、その県下屈指の旧家の評判はどうなんだ?」
すると飯橋は皮肉交じりの笑顔をつくった。
「アンタ……、さっきの態度みて評判いいと思う?」
思わない。きっと思わない。絶対思わない。思ってたまるか!
「県内の政治的影響力は大したものを持っているけど、評判は必ずしもよくはないわね。けっこう危ない橋を渡っているみたいだし。それに……」
「鬼の一族か?」
飯橋が言う前に俺の方から切り出してやった。

「ああ、知っていたのね。まあ私も人から聞いた話だけど。一族の中から人殺しをする人間が出るって話、桂城家はかつて先祖が鬼の血を飲んだことによって、代々子孫は鬼を身体の中に飼っていて、時折その鬼が表に出てきて人を殺しまわるっていう、所謂「伝説」の類の話よ。まあ実際、ここまで成り上がるのにけっこう悪どくて血も涙もないようなことをやってきたみたいだから、ある意味鬼のような一族よね」

「そ、そうなんですか」

瑞希はさっきの俺と同じように、智子さんに確認の視線を送った。

「私も詳しくは存じませんが、一族の中でも主導権争いのため色々争い事があったと聞いています」

なるほど。確かに一族の中から必ず殺人者が出るというのは胡散臭い話だ。しかし、桂城家がここまで成り上がってきたのは、「それ相応の」事を起こしてきたからである。その姿を周りの人間……桂城家に睨まれてしまった人間は、この一族を「鬼」と揶揄してきたのであろう。

「何か……怖いね」

瑞希が不安そうな表情で俺を見つめてきた。何か昨日の晩から瑞希のこんな表情ばかりを眼にしているような気がする。元々俺たちは撮影旅行で水崎を訪れた。そして瑞希には併せて俺たちの「おもいでづくり」というささやかな目的があった。それが昨日、あの不可解な影を撮影してしまったばっかりに、あまりにも不気味な事件に巻き込まれてしまったのだ。俺は瑞希が気の毒でしょうがなかった。そして、彼女である瑞希をこんな表情にしてしまった自分の不甲斐無さに苛立ちを覚えた。

（大丈夫だ。俺がついているだろ）

みんないるので恥ずかしいから声には出さず、しかし態度で理解してもらえるよう、俺は瑞希の肩を抱き、頭を撫でてやった。

後で気付いたが、こっちの方が恥ずかしい行為であった。

そしてこの後、飯橋は「うらら」へと帰っていき、俺たちも部屋

に戻り就寝することにした。
本当に長い長い一日であった。

第四章　更なる惨劇　そして決意

一

ピンポーン

ジメジメとした空気の中にチャイム音が鳴り響いた。

昼食を買いにいこうと俺と瑞希が玄関へ降りてきたとき、智子さんに呼び止められた。「うらら」より飯橋が電話をかけてきたのだ。電話の内容を要約すると「今からこっちへ来い」というものであった。昼を食べてから行くと伝えようとしたが、「今すぐ来い」と念入りに言われたため、仕方なく瑞希と共に「うらら」へ向かうこととなったのだ。

「は～い」

間の抜けた少々幼い声（本人が知ったら怒るであろう）がしてドアが開いた。出てきたのは飯橋本人であった。

「あれ？　管理人さんは？」

「ああ、今蓮君とお散歩に出て行ってる」

そう言うと飯橋は手に持っていた鍵で玄関のドアを施錠した。

「あれ、寛子さん。何で鍵閉めたのですか？」

すると飯橋は門を開けて俺たちの前へ出てきた。よく見ると背中にはリュックサックと完全にお出かけモードだった。

「なあ、これからどっか行くのか？」

俺たちはただ「うらら」に来いと言われただけで、何の用意もしていない。「うらら」に呼ばれた理由も聞かされていないのだ。

「うん、実はね、これからもう一度あの廃屋に行ってみようと思うんだ」

……。

「あっそう」

俺は思いっきり他人事な感じで応えてやった。横に目をやると瑞

希が顔を引きつらせていた。
「何その私たちは全く関係ありません的な言い方は」
飯橋は頬を膨らませた。こいつは本当にアホだ。
「あのなあ、お前昨日の一件をキレイさっぱり忘れちまったのか？
お前は鳥頭か？」
俺は飯橋の耳元で思いっきりどなってやった。昨日あんなことになったばかりだってなのに。これ以上俺たちを巻き込まないでくれ！
飯橋は余程耳がキンキンしたのか、涙目で俺を睨みながら指で耳の穴をほじっていた。
「そんな大声ださなくてもいいじゃないの。私だって昨日言ったでしょ。この事件を調査するって」
確かに昨晩俺たちは飯橋から、自分はこの事件を調査してみるということを聞いた。しかしそれはあくまで飯橋が勝手にやっていること。俺たちはそれに協力しようなんて微塵も感じちゃいない。むしろ関わりたくない程なのだ。
俺は瑞希の手を引いて踵を返した。
「ちょ、ちょっと！」
飯橋は俺のとった行動にかなり動揺した様子だった。
「もうこれ以上、俺たちに関わらないでくれ」
俺は背中越しに飯橋に向けて決別の言葉を放った。そして足早に「うらら」を後にした。
「そ、壮介君」
一度瑞希の声がしたが、その後は続かなかった。瑞希としては飯橋を気遣いたかったのだろうけど、俺のマジな表情を見て、それ以上の言葉が出てこなかったのだろう。
確かに飯橋には少々酷な態度を示してしまった。しかし、俺には俺の都合がある。俺は瑞希を守らなければならないのだ。
俺たちが去っていく間、後ろからは何も聞こえてはこなかった。
飯橋は何も言わなかった。

二

「何か、雨降ってきそうだね」
俺たちが「うらら」を後にしてから瑞希が初めて言葉を発した。その言葉に反応して空を見上げると、灰色の雲が空を覆っていた。そういえば今日は朝から雲が多く、じめじめしていた。
そろそろ一雨くるかもしれない。そう思った瞬間、顔に水分が弾いたような感触があった。
「降ってきたね」
瑞希も感じたようで俺に伝えてきた。
「走るか」
俺は瑞希にそう告げて、「うらら」の時から掴んでいた瑞希の手を離した。よく見るとそこにはうっすらと俺の手の後がついていた。あの時は頭に血が上っていたから、けっこう強めに握っていたようだ。
「悪い、痛かったか」
すると瑞希はニッと笑い、手をヒラヒラさせて見せた。何かこんな瑞希の笑顔を見たのは久しぶりのように感じる。実際には二日ぶりなのだが、昨日という一日があまりにも長く感じられたため、たった一日の間隔がひと月にも一年にも感じられた。
「どっちかって言うと、嬉しかったな。ちょっとだけど」
その言葉に俺は速くなっていた足取りを少し緩めた。
「だって壮介君のほうから手を繋いでくれたことって殆んどなかったし、しかもあんな問答無用な形では初めてだったから。壮介君、頼もしいって思っちゃった」
瑞希は目を伏せ恥ずかしそうな様子であった。これも何だか久しぶりに感じるオノロケモードである。
しかし瑞希は俺より一足先にオノロケモードから素に戻った。
「寛子さんには申し訳ないけど、私もどっちかって言うとこの事件にはこれ以上関わりたくないかな。調査って言っても、それは警察

がやることだし、私たちが付け入る隙なんてあるわけないよ」
確かに瑞希の言うとおりである。昨日俺たちがあの廃屋で死体を発見した時点で、この件は俺たちから警察へと移っているのである。下手に手を出してどんな火傷をするか判ったもんじゃない。
「でも、壮介君。やっぱり寛子さんにさっきはちょっとキツく当たりすぎたよ。後で電話して謝っておこう」
まあ瑞希の言うとおり、あのときの俺はけっこうキツい態度で飯橋に当たってしまった。いくら本人の行動に原因があるとはいえ、冷静さを欠いたまま別れるのは後味が悪い。後でちゃんとフォローしておかなかればならないのかもしれない。
そんな事を考えているうちに空から降ってくる雨粒は肉眼でも判るくらい、多く大きくなっていた。

三

ザーッ
俺たちが雨粒を肉眼で確認してから数分も経たないうちに、雨はバケツをひっくり返したかのようになっていた。大粒の雨が地面や俺たちの身体に容赦なく叩きつけてきた。俺たちは全力で走り何とかずぶ濡れになることなく「しまだ」に到着した。
玄関に入ると智子さんが俺たちにバスタオルを渡してくれた。食堂の窓から俺たちの走ってくる姿が見えたそうである。俺たちは身体を一通り拭いた後、着替えるために部屋に戻った（といっても、瑞希とは別々にだが）。
ロビーで瑞希が出てくるのを待っていると、フロントの電話が鳴った。三回くらい鳴ってから智子さんがやってきて電話を取った。二言三言言葉を交わすと、チラッと俺の方を見て次の瞬間、ロビーに電話の保留音が鳴り響いた。
「新谷さん、お電話です。飯橋さんからです」
智子さんはそう言って受話器を俺に向けてきた。

俺は少しドキッとした。こちらから連絡しようとは思っていたが、まさか飯橋の方から連絡がくることは思っていなかったからだ。俺はフロントの電話に近付き、保留を解除して恐る恐る受話器を握った。

「はい、もしもし」

俺は一瞬息を飲んだ。向こう側から声が聞こえてくるまでの時間がすごく長く感じた。

「は～い、もしもし～」

すると受話器から聞こえてきたのは間の抜けた、歳の割りに幼い声であった。

「今何か、とても失礼な事を考えたでしょ。まあそれはいいとして」

だから何でこいつは俺の考えている事が判るんだ！

「あの～、さっきはゴメンね。ちょっと無神経だったわ。謝るよ」

飯橋はさっきの「うらら」での一件を真面目に謝罪してくれた。俺もあの時キツく当たってしまった事を謝罪した。

「いいよ。私が悪かったんだから」

飯橋の話によると、あの時の俺がとった行動で、自分のしている事があまりに軽率なものであるとようやく自覚したのだという。

「私はさ、一人で水崎に来たから、他には全く気をつかわず考えたままで行動できちゃうけど、アンタは違うもんね。瑞希ちゃんがいるからね」

もし俺が一人で水崎に来ていたのならば、もしかしたらこの事件に首を突っ込んでいたかもしれない。しかし、俺には瑞希がいる。俺は瑞希を悲しませたらいけない。俺が瑞希を守らなければならないのだ。

「悪いな。俺には自分の大切な人を守ることが最優先なんだ」

すると受話器の向こうで、こっ恥ずかしいような笑い声が聞こえてきた。

「な、何だよ。笑うなよ。俺はメチャクチャ真剣に考えているんだよ」

俺も言っておいて恥ずかしくなってきたのでムキになった。
「でも、いいわね瑞希ちゃん。なかなか頼もしいカレシがいてくれて。ちょっと羨ましいわ」
この時から飯橋の語調が少し変化した。いつもの間の抜けた感じではなく、大人びたものになった。
「瑞希ちゃん、アンタといる時さ、凄く幸せそうだよね。私にはアンタの魅力は正直よくわからないけど、瑞希ちゃん見てると何だかアンタが凄くいい男に思えてくるのよね。ホントいいカノジョ持ったわねえ」
俺はあんまり意識していなかったが、第三者が俺たちをみるとそんなカンジになっているようである。俺も瑞希と一緒にいるのは楽しいと思っている。瑞希が俺といることで幸せそうな表情でいてくれていることは、恥ずかしいことだけど、それ以上に嬉しいことであった。
「大事にしなさいよぅ。マジでアンタにはもったいないくらいの女の子よ」
それは俺が一番感じている。
「わかっているよ、そんなこと」
俺は照れ隠しもあってか、ちょっと強い口調で返答した。
「ところで瑞希ちゃんは？」
瑞希は今着替え中である。俺はそのことを飯橋に伝えた。
「そっか。じゃあ今アンタの隣りには瑞希ちゃんはいないんだね」
突然飯橋の口調が変化した。さっきにも増してマジなトーンであった。俺は突然の変化に少し戸惑った。
「ちょっとね、アンタの耳に入れておきたい事があるの。誰にも言っちゃ駄目よ」
いきなりどうしたのであろうか。今までの飯橋の様子とは明らかに違っていた。
「今度の連続殺人事件について私なりに色々調査しているのは言っていていたよね。それについてとんでもないモノを見つけちゃった

の。もしかしたら犯人に結びつくようなモノを」
爆弾発言である。今回の事件の犯人に結びつくかもしれないモノ？それが一体何なのか全く検討がつかなかった。普段なら、横に瑞希がいたなら無視していたかもしれない。しかし今横に瑞希がいない。しかも飯橋の言い方がもったいぶったものに聞こえたため、俺の中にある好奇心が芽を出してしまった。
「な、何だよ、それって」
俺は飯橋に訊ねた。そのとんでもないモノについて。
「実はね、雨が降ってきてから、あれ……ひっ！」
その時
ガタンッ！　ガチャッ！　ドスン！
飯橋の声が途切れてから受話器の向こう側で様々な物音が聞こえた。それは受話器が床に落ちた音であろう。受話器が床に落ちたということは、飯橋が受話器から手を離した。つまり受話器を下に落としたということである。
俺は受話器を強く握り締め、何度も飯橋の名前を呼んだ。しばらくして、受話器から「ツーッ、ツーッ」という音が繰り返し流れてきた。それは受話器が置かれたということ。
そして、それは……！
俺は静かに受話器を置いた。俺のただならぬ雰囲気を感じたのか、智子さんが俺の横で固まっていた。
「壮介くーん。終わったよ～」
瑞希が着替えを終えて一階へと降りてきた。
「ん、壮介君。寛子さんに電話してたの？」
寛子　　飯橋寛子
「あぁーっ！」
俺は堪らず絶叫した。そして俺は玄関を飛び出し土砂降りの中を走り出していた。
後ろからは瑞希の俺を呼ぶ声が響いていた。

四

俺は雨の中、ひたすら「うらら」に向かって走っていた。髪が濡れようが泥が跳ねようが全くお構いなし。あの飯橋からの電話が不可解な途切れ方をした時、俺はとても嫌な予感がした。飯橋は今回の事件について、もしかしたら核心に迫る何かを知ってしまったのだ。それにより、飯橋の身に危険が迫ってしまった。俺の頭の中は「最悪の場合」でいっぱいだった。できれば考えたくもないことが、何とも言いようのない不安として、俺の頭にへばりついてきていた。

「しまだ」を飛び出してからけっこう経った。これまで全くスピードを緩めずに走ってきた。もう間もなく「うらら」の建物が見えてくるはず。そう考えていた時、前方の角から俺と同じく「うらら」方向へ走っていく人影が目についた。そしてその影には見覚えがあった。

「管理人さーん！」

俺の声に前方を走っていた二つの人影は立ち止まり振り向いた。田原加奈美さんと息子の蓮君であった。俺は二人の傍まで行き立ち止まった。俺の意志とは関係なく心臓がバクバクして、肩で息をした。そして今まで気付かなかったが、雨の勢いはやや落ち着いてきていた。

「どうされたのですか？」

加奈美さんは俺の只ならぬ姿を見て驚きを隠せないようであった。蓮君は怖がっているのか、加奈美さんの後ろに隠れていた。

「はぁ、はぁ、「うらら」には、今誰がいるんですか？」

今の俺は声を出すことがとても辛かったが、飯橋の安否が最優先だったため、搾り出すように訊ねた。

「はあ、寛子さん一人だと思います」

そう言えば、飯橋は「うらら」の鍵を持っていた。飯橋の話によると、加奈美さんと蓮君は散歩に出かけていると言っていた。

「私と蓮は今まで散歩に出ていたのです。その途中でこの夕立にあ

って、しばらく雨宿りしていたのですが、先程から雨が少し弱くなってきたので、今のうちに戻ろうと思っていたのですが」
そして加奈美さんの表情が険しくなった。
「何かあったのですか？」
そうだ、こんな所でへたり込んではいられない。早く「うらら」に向かわなければ。俺は二、三度深呼吸して前を向いた。
「管理人さん。俺もよくわからないけど。飯橋の身に何かあったみたいなんです。事は一刻を争います。早く「うらら」に向かいましょう！」
そして後ろから瑞希の声も近付いてきた。
俺と瑞希は加奈美さんから鍵を預かり、一足先に「うらら」へと向かった。加奈美さんが遅れるのは蓮君が俺たちのスピードについて来れないからであった。瑞希も傘もささずに走ってきたため、折角着替えた服がずぶ濡れになっていた。
そして俺たちは「うらら」の前に来た。門は開いていた。俺は門には一切手を振れず敷地の中へと入った。瑞希も後に続いた。
俺は玄関のドアノブに手をかけた。瑞希の方を見るととても不安気な表情をしていた。
「大丈夫だよ。壮介君」
しかし意外にも瑞希の声はしっかりとしていた。もしかしたら、瑞希から見た俺の表情は今までにないくらい不安気なものだったのかもしれない。
俺はドアノブを引いてみた。するとカチャリという小さな音と共に、扉は開かれた。鍵はかかっていなかった。
「瑞希、お前はここで待ってろ」
俺は最悪の事を考えていた。もしここで待っているのが「最悪の事」ならば、瑞希は昨日の二の舞だ。俺は瑞希にそんな辛い経験をもうさせたくなかった。
しかし、俺の思いとは裏腹に、瑞希は俺から離れようとせず、俺の手をギュッと強く握り締めてきた。

「私は大丈夫。壮介君がいるから。さ、行こ」
俺よりも先に瑞希が館内に足を踏み入れた。俺たちは玄関で靴を脱ぎ、中へと入っていった。
俺はあたりを見回した。すると一つかすかにドアが開いている部屋があった。確かここはリビングだ。俺はこの部屋から異様な雰囲気を感じた。それは瑞希も同じようで、俺たちは同じ所を凝視していた。
「いくぞ」
先に声を発したのは俺だった。瑞希の手を強く握り締め一歩一歩リビングへと近付いていった。
「開けるよ」
ドアの前に来た俺たちは一度お互いの顔を見合わせた。そして瑞希がドアノブに手をかけた。
ギイィ
ドアを開けると、部屋は真っ暗だった。このリビングには遮光性の強いカーテンが使用されているようで、雨空ということもあって、とても昼とは思えない風景だった。そんな部屋を俺たちは目を凝らして覗いた。
すると、俺の手を握る瑞希の手の力が強くなった。そして小刻みに震えている。そして眼が暗闇に慣れてくるにつれて、リビングの床の上に何らかの影を確認していた。
ふと横を見ると壁に電気のスイッチがあった。俺は震える手を伸ばし、スイッチを押した。
「ひっ！」
瑞希が最早声にならない声を上げ、俺の身体にしがみついてきた。かく言う俺も驚きのあまり瑞希の身体に抱きつくような格好になった。
俺たちは凍り付いていた。
俺たちの視線の先には、一面血の海の化した床にうつ伏せになって横たわる、飯橋の変わり果てた姿があった。

五

俺と瑞希は飯橋の部屋にいた。今までの人生の中で経験などしたことのない「混乱」を落ち着かせるために必死であった。この部屋に入ってから俺も瑞希も無言であった。しゃべる余裕すらないのである。瑞希はベッドの上に蹲り、俺は壁にもたれて床にだらしなくうなだれていた。

警察へは加奈美さんが通報してくれた。俺たちはあまりの衝撃でそれすら考えが及ばなかったのである。ただ、瑞希は前回のようなパニックを起こすことはなく、比較的落ち着いていてくれた。

五分程前にパトカーが近付いてくる音が聞こえた。今一階では警察が現場検証をして、飯橋の遺体を運び出そうとしているのであろう。

何でこんなことが起きたのであろうか。俺は一昨日からの流れを振り返ってみた。俺と瑞希は撮影旅行のために水崎へやってきて、撮影の最中に飯橋と偶然出会って、そこから意気投合して、一緒に撮影をした。その夜、この部屋で瑞希の撮影したビデオをみんなで観た。そこに変な影が映っていて、次の日その影を確かめに行った。そこで俺たちは死体を発見してしまった。

ここから全てが始まった。俺たちはあの「影」に気付いてしまったばっかりに、このあまりに残酷な惨劇に巻き込まれてしまった。あんな「影」に気付かなければよかった。あの「影」は触れてはいけないものだったのだ。

何がいけなかったのだろうか。俺の何が悪かったのだろうか。俺はこの件に関わるのを嫌がる瑞希の傍にいた。瑞希を守るために、飯橋の好奇心を破壊してやらなければならなかったのだ。でも、俺の中にはごく小さな飯橋と同じ「好奇心」があった。その小さな俺の弱さがこの事態を招いてしまったのではないだろうか。もし殺人は防げなかったとしても、少なくとも俺たちが関わることはなかっ

た。飯橋も死なずに済んだのではないのだろうか。俺が全部悪いのだろうか。俺が悪かったのか。

「だめだよ」

不意に俺の身体を何かが包み込んだ。それは少し汗ばんでいるが、とても気持ちよくて、心が落ち着いていくのが判った。その正体は瑞希であった。

「壮介君は何も悪くない。みんなをちゃんと守ってくれた。自分を責めちゃ嫌だよ」

瑞希の声も震えていた。怖い気持ち、不安な気持ち、そして自責の思いは俺と同じ、若しくは俺以上なのかもしれない。それでも瑞希は、俺にこんな優しい言葉をかけてくれた。

これ以上ないくらい、カノジョの温かさを感じた。ずっとこうしていたい。

違う。瑞希は震えているのだ。

どうした新谷壮介！

俺は瑞希を守ると誓ったんじゃないのか。なのに今は逆に瑞希の優しさに甘えようとしている。俺がこのまま沈んでしまったら。瑞希はもっともっと沈んでいってしまう。そんなことは絶対に駄目だ。ダメだ！

俺は瑞希の身体を一瞬抱きしめ、そして引き離した。

俺は頭をブルブルッと振り、立ち上がった。瑞希も俺に合わせて立ち上がった。

「悪い、瑞希。ちょっとブルーになってたよ」

俺は申し訳なく思い、瑞希に苦笑いをしてみせた。すると瑞希も苦笑いをした。そうだ、俺たちの思いは一緒なのだ。怖いのも一緒。不安なのも一緒。誰かにすがってしまいたいのも一緒。でも、今自分が何をしたいのか。何をしなければならないのか。その思いも一緒。

だから言おう。俺と瑞希がやるべき事を。

「「犯人を必ず見つけ出そう」」

同じ想い。それを証明するかのように、同じ言葉がお互いの口から出ていた。

六

コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「すみません。警察の方がみえられているのですが」

声は加奈美さんのものであった。俺と瑞希は一度顔を合わせ、そして意を決し頷いた。瑞希がドアに近付きノブに手をかけた。

ドアを開くと先頭に加奈美さん、後方には昨日出会った坂刑事の姿があった。瑞希はドアをさらに開き坂刑事を部屋に招き入れた。

「いや、とんでもないことになってしまったねえ」

坂刑事は苦々しく頭を掻きベッドの上に座った。俺たちも向かい側のベッドに腰掛けた。

「これから遺体発見までの経緯を聞きたいんだけど、大丈夫かな？」

俺たちは力強く頷き、ここまでに至った経緯を話した。今日の昼、飯橋があの廃屋へ行こうと言ってきたこと。それを俺たちが突っぱねた事。その後飯橋からかかってきた電話の事。電話の最中、突然飯橋の様子が変わった事。そして死体を発見した時の事。一つ一つ思い出して、自らにこの現実を突きつけるように話していった。

「うん、判った。遺体が発見された後の事は田原加奈美さんに聞いたことと同じだね」

坂刑事は一つ一つを確認しながら手帳に文字を書き込んでいった。

「あ、あの」

お互いの言葉が途切れた時、これまで頷く程度でしかなかった瑞希が口を開いた。

「死因は……死因は何なのですか？」

坂刑事はこの質問がきたことに驚いているようだった。何故そんな事を知りたいのかといった感じだ。しばらく間があった後、手帳のページを数枚めくった。

「今検死にまわしているから、正確な事は言えないが、おそらく左胸にある鋭利な刃物での刺し傷が致命傷だろう。だから死因は出血多量による失血死だ」
俺はそれを聞いて、「ある疑問」が浮かんだ。
「あの、傷は一つだけだったのですか？」
それを聞いた坂刑事は顔をしかめた。何を聞いてくるんだコイツはという感じであった。少し考えた後、坂刑事は口を開いた。
「ああ、左胸の一箇所だけだ。それがどうかしたのか？」
そうだ、おかしいのだ。もしこの一連殺人が同じ人物の元で行われているのだとしたら。
「傷が、少ない？」
瑞希が俺の考えていた事を言葉で表現してくれた。そうなのだ。第一の事件、桂城博敏は顔はおろか頭の形すらも原型を留めていないくらい殴打されて殺されていた。第二の事件、桂城好太郎は身体を十数箇所刺された上、湖に捨てられた。しかし今回の事件、飯橋の「殺され方」は何だかあっさりしているように思えた。俺はその事を坂刑事に話してみた。
「殺人にあっさりもこってりもないんだけどな」
坂刑事は大きなため息をついた。現場の人間にしてみれば確かにそうである。坂刑事は再び手帳のページをめくった。
「確かにそうだ。桂城博敏は頭蓋骨がメチャメチャになるほど殴られている。身元は指紋と歯型で確認しなきゃならなったよ。これはマスコミに発表はしていないのだが、桂城好太郎の傷は主に胸から上に集中していた」
そして坂刑事は鋭い視線で俺たちを突き刺した。
「これが何を意味するか、判るか」
俺は思いついたことを言葉にしていた。
「怨み」
横では瑞希も頷いていた。もし単純な殺人なら、相手が息をしていないことを確認できればそれで成立する。それ以上手を加えても

不毛なのだ。むしろ始末を長引かせる事で自身の身に危険が迫る可能性もある。そんなリスクを背負ってまで、相手の死に拘る理由、それは相手に対する憎悪。相手を八つ裂きにしても飽き足りないような凄まじい憎悪。俺は桂城博敏と好太郎の殺人には、そんな恐ろしい感情を感じずにはいられなかった。

「これはまだ、内偵の段階なんだ。他言はしないでくれよ」

判る。坂刑事の口調が今までと違う。俺は踏み入れてはいけない所に足を入れたことを確信した。

「君の言う通り、ガイシャの状況から殺人の動機は怨恨の可能性が高い。頭蓋骨を砕いたり、顔や胸をメッタ刺しにするなんて正気の沙汰じゃない。今、桂城家の人間関係を調べているところだ。桂城家内部も含めてね」

すると瑞希が身体を乗り出した。

「じゃあ、桂城家の中に犯人がいる可能性もあるのですか？」

坂刑事は瑞希の言葉にニヤリとした。

「桂城博敏は現在の一族の中で一、二を争う豪腕で知られる男だ。まあ親父や祖父譲りなんだろうけど、自分がのし上がるためには一族の人間も蹴落としかねない男だ。「鬼の共喰い」があってもおかしくはないね。尤も、桂城一族に対して怨みを持っているヤツなんて掃いて捨てる程いるってもんだよ」

鬼の共喰い。自分がのし上がるためには一族の人間を躊躇無く蹴落としていく。それはこの一族が「鬼の一族」と呼ばれる所以なのだろう。今までに聞いた桂城家についての事。そして昨日実際に会った桂城家の人間について考えると、あながち間違ってはいないのかなと感じた。しかしそう考えれば考える程、飯橋の殺され方は妙であった。

「飯橋は水崎の人間じゃない。つい最近旅行でやってきただけなんだ。動機が怨みなわけないんだ。それに……」

飯橋からの電話。あの時飯橋は、犯人につながるかもしれないモノを見つけたと言っていた。これが殺された理由なのではないだろ

うか。
「判っている。少なくとも、犯人は飯橋さんを最初から殺すつもりはなかった。しかし、飯橋さんに何らかの証拠を知られてしまったため、口封じのために殺した」
そう考えれば、話の辻褄があう。しかし飯橋が何を知ってしまったかについては、今となっては闇の中だ。
「しかし、それに関しては断言できない」
坂刑事は一つ咳払いをしてから話し始めた。
「全ての犯人が同一というのは、現段階では一つの可能性にすぎないんだ。飯橋さんについては犯人が別にいる可能性もある。例えば物盗りの犯行。実はここの世話人の田原加奈美さんの居室に、物色された跡があったんだ」
俺たちがここへ来た時、鍵は開いていた。つまり、飯橋は鍵を開けたまま部屋に戻ってきた。その時、空き巣が「うらら」に侵入。加奈美さんの部屋を物色している最中に飯橋が下に降りてきた。そこで空き巣を鉢合わせとなり、殺された。
確かに、それはそれで一応の筋は通っている。しかし何故だか釈然としなかった。飯橋の殺され方はあっさりしているが確実なものである。物盗りで急にバッタリ出くわして、そんな確実な殺し方ができるのであろうか。
コンコン
その時、再びドアをノックする音が聞こえた。こちらが返事をする前にドアが開き作業服のようなものを着た男性が入ってきた。帽子には「鑑識」と書いてあった。
「ちょっと失礼」
坂刑事はそう言うとベッドから立ち上がり、鑑識の男性と一緒に部屋を出て行った。五分程して坂刑事が戻ってきた。
「飯橋さんの死因は左胸を刺された事による失血死でほぼ決まりだそうだ。凶器は鋭利な刃物。傷は心臓にも届いており、ほぼ即死だそうだ。死亡推定時刻は今から三、四時間前だ」

三〜四時間前。俺が飯橋と電話で話していた頃だ。やはり飯橋は電話の最中に誰かに襲われたのだ。

「それとこの傷には、妙な特徴があるそうだ」

妙な特徴？それは一体何なんだ。俺と瑞希はベッドから立ち上がった。

「鑑識は専門用語で話したんだが、君らには多分判らないと思うから簡潔に言うぞ。飯橋さんの左胸の傷は刃を水平に突き立てて刺したものではなく、下から上へ突き上げるような感じで刺したものらしい」

下から上に突き上げる。ということは、犯人は飯橋の懐に潜り込んで刺したということになる。飯橋は身長が百五十センチあるかないかである。そのような刺し方は不自然である。何故そのような傷ができたのであろうか？

新たな謎が俺たちを包み込んでいった。

七

坂刑事と話をした後、俺と瑞希は「しまだ」へと戻った。その頃には外はだいぶ暗くなってきていたので、坂刑事からパトカーで送ってあげようかと言われたが、丁重に断り歩いて帰ることにした。別にやましいことはないのだが、パトカーに乗るというのはあまり気持ちのいいものではないからだ。それに色々と考え事をしたかった。それに関しては瑞希も同じだったようである。

「しまだ」への帰り道、俺も瑞希も無言であった。自分自身は考え事をしているし、また相手の考え事の邪魔をしたくはなかった。

何を考えているのか？それは何故このような事件が起こり、犯人は一体誰なのかという事は勿論だが、それら以上に、これから自分たちはどうなるのか、どうすべきなのかという事であった。瑞希の表情を見てみると、俺と同じ事を考えているのが理解できた。なかなかむずかしい顔であった。

十数分後、俺たちは「しまだ」の前に到着した。瑞希を敷地内へ入ろうとした時、俺の方から口を開いた。
「明日、どうする？」
すると瑞希は俺の方に振り返った。振り向いた時、瑞希はさっきまでと同じむずかしい顔をしていた。しかし俺と目が合うと、ニッと笑顔をつくった。
「壮介君、今日はらしくないね」
瑞希は俺の方に歩み寄ってきて、そして俺の横を通り過ぎて「しまだ」の敷地から少し離れた場所で立ち止まった。そこは水崎湖畔へと続く別れ道であった。俺は瑞希の後ろに続いた。
瑞希は無言のまま湖畔への道を歩き続け、そのまま遊歩道へと入っていった。そして遊歩道の入り口から三分程歩いたところにあるベンチの前で立ち止まり、そこに座った。
「夜になると、ここは肌寒いくらいだね」
瑞希は上目遣いに俺を見て笑った。何だか少し色っぽい雰囲気だ。
「私……明日ね、寛子さんの遺品を整理しようと思っているんだ。刑事さんの話によると、寛子さんの御家族がこっちにくるのは後になるそうなの。それまでにある程度整理しようかなって」
本来なら事件が解決するまで、最低でも家族さんが来るまではそのままの状態で置いておいたほうがいいであろう。しかし瑞希にとって、飯橋は短い間の付き合いだったけれど、とても仲良くなれた大切な友達になれたのであろう。だからその友達が生きていた証を、少しでも心に刻みたいと考えいるのであろうか。本当はやめたほうがいいんじゃないかと思うが、ここは瑞希の心情を酌んでやりたかった。
俺は瑞希の隣りに座り手を握った。
「警察には俺が適当に話しておくよ」
俺の言葉に、瑞希は無言で頷いた。
「ただし、ビデオカメラの件はちゃんと言うぞ。今日もなんやかんやで言いそびれちまったし」

そう、俺たちがあの廃屋へ向かった本当の理由はビデオカメラの中にあった。俺がプレゼントしたあのビデオカメラを警察に持っていかれてしまうことを恐れた瑞希が、その映像の存在を隠し続けていた。しかし、この状況になってそんな事は言っていられない。

俺の言葉の後、数秒の間があってから瑞希は静かに頷いた。

瑞希は明日自分が何をするべきか答えた。そして今度は俺の番。瑞希と一緒に部屋の整理をするのもいいだろう。しかし、俺はこの事件の深層を飯橋の代わりに探ってみようと考えていた。しかし警察でも対応に苦慮しているような事件を、俺ごときに何ができるのか、それを必死に考えた。

すると瑞希からある一枚のメモを渡された。

「これ、寛子さんがいつも持っていた手帳を開こうとした時、挟まっていたの」

俺はメモに目を通してみた。そこには汚い走り書きで住所と電話番号等が記されていた。

そしてメモ書きの一番下に、桂城銀造という名前が書き記されていた。

八

翌日、俺は飯橋が会おうとして会うことができなかった、桂城銀造に会いに行くこととなった。素人の大学生がどこまでできるかは判らないが、俺も瑞希も、俺たちを事件に巻き込み、飯橋を殺した犯人をこの手で捕まえたかった。そして、もしこの一連の事件に、桂城一族が絡んでいるのならば、あの廃屋の持ち主であった銀造には、どうしても会いたかったのだ。

昨晩、俺は智子さんから水崎周辺の地図を借り、メモに書かれている地名を探した。以前に飯橋が言っていた通り、銀造が入所している老人ホームは隣村にあった。調べてみると、俺たちが水崎へとやってきた際に乗ってきたローカル線の沿線であった。といっても、

駅から近いというわけではなく、駅からはけっこうな距離があるようだった。これにより半日は潰れてしまうだろう。
そして瑞希は、昨晩話した通り「うらら」へと赴き、飯橋の遺品整理を行い、警察にビデオ映像を渡すこととなった。正直、瑞希を一人にしたくはなかったが、「うらら」には世話人である加奈美さんがいるから大丈夫だと言っていた。
俺たちは朝食を摂ってから、準備を済ませてすぐ出発した。「うらら」へは真っ直ぐ向かった。この時点で別れてもよかったが、もし警察が来ていれば瑞希と一緒にビデオの件を説明しようと思ったため、一応ついて行くこととなった。
「しまだ」を出発して十数分、「うらら」に到着した。パトカー等は停まっていないので、警察関係はまだ来ていないようであった。
そしてチャイムを鳴らすと加奈美さんが顔を出した。俺が遺品整理の事を伝えると、しばらくの間があった後、中へと促された。
「本当に、大丈夫なのでしょうか？」
飯橋の部屋へ向かう途中、加奈美さんが心配そうな表情で訊ねてきた。おそらく、警察からは事件が一段落するまで現場の現状を維持するよう言われているのだろう。
「あの部屋は直接関係ないでしょ。警察が何か言ってきたら、こっちに話をまわして下さい」
俺の答えに、加奈美さんは不安そうな返事をした。まあ、本当はあまりするべきことではないのは俺たちも判っている。これはあくまで俺たちの感情の問題だ。
「あの加奈美さん。一つ聞いていいですか」
飯橋の部屋の前へ着いた時、瑞希が唐突に口を開いた。加奈美さんは「はい」と言い頷いた。
「私たちがここへ出入りするようになってから、寛子さん以外のお客さんを見ていないのです。なのに、何故この部屋を寛子さんに？」
確かにそれは気になっていた。瑞希の言う通り、ここで飯橋以外の宿泊客を見ていない。つまり飯橋の部屋以外は全て空き室のはず

である。他にも空き部屋がある状態で、何故壁の一部が切り取られている「傷モノ」の部屋なんかをあてがったのだろうか？
　すると加奈美さんは薄く苦笑いをした。
「実は、寛子さんは一週間程前に予約無しの飛び込みでいらしたんです。その時大学サークルの団体様が合宿として宿泊されていたので、この部屋以外は満室だったのです。団体様がお帰りになった後、部屋を変えられるかどうかお訊ねしたところ、寛子さんの方から「このままでいい」とおっしゃられたので、ずっとお使いになられるということになったのです」
　どうせあの飯橋のことだ。今更部屋変えするのは面倒くさいと考えたのであろう。瑞希もそう考えたのか苦笑いをしていた。
「それでは、何かありましたからお呼び下さい」
　下へと降りていく加奈美さんを見送り、俺たちは部屋へと入った。
　部屋はカーテンが閉められているので真っ暗であった。電気をつけると以前に俺たちがこの部屋を訪れた時ほぼそのままの状態であった。
「じゃあ、始めるね」
　瑞希はそう言い、飯橋のカバンの前に座った。その姿を見て、俺も自分のやるべき事をやらなければと思い、部屋を出ようとした。しかしその時、あるものが目についた。切り取られた壁であった。
「なあ、ここ板はめておこうか」
　瑞希に訊ねると頷いたので、クローゼットにしまってある壁の穴を塞いでいた板を取り出した。そして俺はイスを持ち出して足場にした。
「うわ、すんげえホコリ」
　イスに登るとクローゼットの天板部分が確認できるのだが、一面白いホコリが積もっていた。照明の関係上、ここの部分は光が届きにくいのだが、それでも白いホコリが確認できる。飯橋が長期滞在をしているため、メイキングがロクにできていなかったのだろう。天板に息を吹きかけるとホコリがムアッと舞い上がった。

飯橋の話によるとこの板はネジで固定されていたとの事、瑞希から飯橋のカバンに入っていたドライバーを借りた。が、ここで一つ問題が起きた。板を固定していたはずのネジが見当たらなかったのだ。念入りに探せばどこからか出てくるかもしれなかったが、この作業に長い時間を取りたくなかった。結局、ネジ探しは瑞希にお願いし、俺は「うらら」を後にして銀造が入所している老人ホームへと向かった。

九

俺は「うらら」を出発してから、水崎駅へ移動して電車に乗り込んだ。この水崎駅は数日前、俺と瑞希が降り立った駅だ。その時、この駅から先へ進むなんて夢にも思っていなかった。ここから先は本当に見知らぬ土地だ。

乗客もまばらなローカル線。窓の外に目をやると、眼下に水崎湖は見えた。こうやって見ると、水崎湖はけっこう大きい湖なんだなと感じる。遊歩道からではなかなか一望できないが、この線路はやや高台を通っているため、温泉街やキャンプ場、あの廃屋の近くにあった貸しボート屋も一度に確認できた。

車窓の縁に手を置いて、景色の移り変わりを眺めていると、水崎湖が視界から消えて電車は山の中へと入っていった。線路と並んで道路があるが、人は勿論車の往来もあまり見かけることはなかった。俺が普段生活している所ではまずありえないことであった。また駅から次の駅への間隔がとても長かった。

電車は山中、長いトンネルをいくつか抜けていった。そして視界にのどかな田園風景が広がった。それと同時に車内アナウンスがあった。間もなく俺が目指す駅に到着する。

水崎駅を出発して一時間弱、銀造が入所している老人ホームの最寄り駅に到着した（と言っても、ここからでもかなりの距離はある）。ここからはバスでの移動となる。本数の少ないバスであったが、

幸い時間がうまく重なった。俺は駅前に停車しているバスに乗り込んだ。駅周辺だけで言うなら、水崎よりも開けていた。智子さんの話によると、この駅がこの村の玄関口になるそうである。しばらくしてバスが発車。これから再び一時間程乗り物の旅となる。

駅を出発して丁度一時間。目的のバス停へと到着した。降りる際、運転手さんに老人ホームの住所を確認した。ここから山の方へ二十分程歩く。バス停からそれらしき建物が見えているので迷うことはなさそうだった。

水崎を含め、この地方は避暑地と知られている。湖畔にいたということもあり、セミの鳴き声はけっこうするが、暑さはあまり感じなかった。しかし今はセミの鳴き声と共に夏の暑さをひしひしと感じていた。俺はリュックからタオルを取り出して頭にハチマキのようにして巻いた。

一歩一歩進む度に、目指す老人ホームが近付いてくる。それと共に、緊張感も高まってきた。正直、勢いでここまでやってきていた。銀造が俺と易々会ってくれる保障なんてない。もしかしたら門前払いをくらうかもしれない。期待と共に不安も増大していった。

そして俺は老人ホームの前に辿り着いた。飯橋の残したメモを見る。看板にはメモに書かれたのと同じ施設名が書かれていた。俺はしばらくここから動けなかった。まるで結界が張られたようであった。俺に邪な思いがあって入れないのではない。ここに足を踏み入れたら、もう後戻りできない所まで行ってしまうのではないかという恐怖がそうさせていた。この先で俺が考えている行動を起こせば、もう今まで通りの生活には戻れないかもしれないという漠然とした緊張感が、そこにはあった。

でもここでは立ち止まれない。俺は瑞希と誓った。飯橋を殺した犯人を見つけ出すため、俺はやらなくてはならなかった。

「アホか。ここまで来たんだ。行くぞ！」

俺は自分の頬を右手で張り、そして結界の張られた雰囲気を蹴散らすように、老人ホームへと突き進んでいった。

十

老人ホームの受付で、俺は銀造との面会を申請した。待つこと数分、面会は拍子抜けするくらいあっさりと許可が下りた。老人ホームの職員さんより、銀造の入所している部屋を教えてもらい、二階へと上がった。俺が訪れた時、二階の広間ではカラオケが催されているようで老人の歌声が聞こえてきた。職員さんによると銀造は部屋にいると教えられた。ということはこのカラオケに銀造は参加していないということになる。それほど容態が悪いのだろうか。ちゃんと話ができるのだろうか。そんな新たな不安が頭をもたげてきた。

「ここだな」

そして俺は職員さんより教えられた部屋に辿り着いた。ネームプレートには「桂城銀造」となっていた。俺は大きく深呼吸をした。

コンコン

俺はノックをして扉を少しだけ開いた。中を覗くと、窓側に置かれているベッドへ横になる老人の姿を確認した。

「失礼します」

俺は扉を開き、居室の中へと入った。すると銀造と思われる老人はこちらに顔を向けてきた。言葉はなかったが、その目で「誰だコイツは？」というのが感じとれた。

「すみません。突然お邪魔して。僕は新谷壮介といいます。学生で、現在旅行で水崎の方で滞在しています」

水崎の言葉を聞いて、老人の眉がかすかに動いた。

「失礼ですが、桂城銀造さんですよね？」

すると老人は無言で頷いた。こちらに対する警戒心はヒシヒシと感じる。

「実は銀造さんにお伺いしたい事があって、突然来させてもらいました」

「何もない」

俺が話を続けようとすると、銀造の声がそれを遮った。見た目はかなりのご老人だが、さすがは桂城一族、その声にはまだまだ迫力があった。
「何もないというのは？」
一気に張り詰めた空気の中、俺は銀造に訊ねてみた。しかしそれ以上、銀造は何も言わなかった。
「今、水崎湖で何が起こっているか、ご存知ですよね。僕はそれら事件の当事者です」
俺は扉を背にして立っていたが、思い切って銀造に近付いてみた。一歩一歩がとても重い。
「昨日、僕の仲間が殺されました。もしかしたらこの事件には、桂城一族が関係しているかもしれないんです。だから、銀造さんが何かを知っているのであれば、教えてください」
すると、銀造は再びこちらを向いた。その表情は険しい。
「それを知って、アンタはどうする？」
「犯人を見つけ出す」
無茶苦茶かもしれないが、俺は銀像の問いかけに即答した。そこまで腹は括っているつもりだ。
銀造は俺を厳しい目つきで睨んできた。
「やめておけ。アンタのような若者が太刀打ちできるような一族ではない。安っぽい好奇心で首を突っ込むと、痛い目を見るぞ」
判る。銀造が俺に言っていることはリアルな「警告」だ。下手をすると俺たちの身にも危険があるかもしれない。しかしそれは最初から承知の上だ。
「俺は、やらなきゃならないんです！」
一瞬、銀造の迫力に圧倒されそうになったが、渾身の思いで言葉をひねり出し、銀造の鬼のような目に喰らいついてやった。
すると銀造は根負けしたのか、呆れたのか、大きなため息をついた。
「全く、最近の若い者は。何で考えて行動をせんのか」

それは若者の短所であり、長所でもあると思う。まあ、冷静に考えて俺の今していることは、はっきり言って「向こう見ず」過ぎる。
銀造は表情を崩した。「やれやれ」という感じであった。
「せっかくここまで来てもらったが、アンタに話すことはないもない。ワシの知っていることは、この間警察に全部話した。それが知りたければ警察に聞いてくれ」
確か飯橋が言っていた。飯橋が銀造に会うためこの老人ホームを訪れた際、先に警察がやってきていて会うことができなかったと。銀造が言っているのは、その時の事であろう。
「あれから、何か思い出した事はありますか？」
すると銀造は首を振った。
「そんな……」
門前払いされる事は予想していたが、「特別には何も知らない」ということは予想していなかった。好奇心によって、変な期待をしていたのか俺は？
「悪いが、アンタに話せるようなことは何もない」
追い討ちをかけるように銀蔵がそう言い放った。俺は思わずへたり込んでしまった。打ち砕かれた期待と切れてしまった緊張感が相まって脱力してしまった。
「再度忠告しておくが、余所者の素人はあまり関わらん方がいい。ワシもＴＶや新聞で事件を知っておるが、かなり気味の悪い事件じゃ」
それは判っている。だからこそ今俺はここにいる。俺たちはこの気味の悪い事件に巻き込まれてしまった。それから抜け出したいから必死に足掻いている。脱出するためには、事件の犯人を必ず見つけ出さなくてはならなかったのだ。
途方に暮れてうなだれていると、銀造が動いた。銀造の方を見ると、何かを話そうとしていた。そして銀造の口が開こうとした時、
コンコン
扉をノックする音がして、扉が開いた。老人ホームの職員さんで

あった。職員さんは銀造ではなく、俺の方を見ていた。
「あの、新谷壮介さんですよね？」
職員さんは俺が受付で記帳した時に対応してくれた人とは違っていたので、名前を確認してきた。
「はい、そうですけれど」
しかし、だったら何故俺の名前を知っているのだろうか？
「うちの方に、新谷さんへのお電話が入っています」
電話……、一体誰だ？　俺がここに来ている事を知っているのは瑞希とせいぜい智子さんくらいである。この辺はケータイの電波は届くようだが、老人ホーム内へ入る際、電源を切っていたのだ。わざわざ老人ホームへ連絡してくるなんて何の用だ？
「すみません。では失礼します。もし何か思い出したことがあったらここに連絡を下さい」
俺は手帳を開き、「しまだ」の住所と電話番号、そして自分の携帯番号を書いた紙を渡した。銀造は机の上に置いておけと無言で伝えてきたので、そうすることにした。捨てられないことを祈ろう。
「では失礼します」
俺は職員さんと共に銀造の部屋を後にし、一階の事務室へと案内された。
事務室に入り、別の職員さんから受話器を渡された。
「もしもし、新谷です」
受話器の向こう側はやけにざわざわしていた。
「もしもし、新谷君か？　県警の坂だ」
電話の主は坂刑事であった。
「どうしたんですか？あぁ、勝手に飯橋の部屋を片付けたり、銀造さんに会いに行っちゃったりした事ですか？スミマセン、坂刑事に相談もなく……」
「それどころじゃないって！」
坂刑事の声に俺はビクッとした。その尋常ならぬ声は周りの方々にも聞こえたようで、みんなこちらを見ていた。

そして俺は嫌な予感がした。水崎でまた何かあったんだ。
「そっちで何かあったんですか？」
俺は恐る恐る訊ねてみた。そして数秒の間があった後、坂刑事が口を開いた」
「君の彼女、岡本瑞希さんが襲われた」
俺は理解できなかった。坂刑事が言っていることを理解できなかった。え、誰が誰に襲われたって？
「もしもし、もしもし？　もう一度言うぞ、岡本瑞希さんが、ペンションで襲われた。現在意識不明の重体だ！」
ガチャーン
俺は受話器から手を離していた。そして頭が真っ白になった。
瑞希が、襲われた……！？
何故だ！　何故だ！　何故だ！
俺は爆発しそうな頭で老人ホームから飛び出した。

第五章　深層　そして真相へ

一

いつの間にか、空は暗くなりはじめていた。パッ、パッという音と共に、病院の廊下が蛍光灯の光に照らされた。ソファで蹲っていた俺には、少し眩しいものであった。

あの時、冷静さを失っていた俺は、バスもタクシーも使わず、ただただ走り続けていた。途中、坂刑事が手配してくれたパトカーに拾われなければ、俺は未だにこの病院には辿り着いていなかったであろう。俺は本当にアホだ。

坂刑事が俺に電話をくれた時、瑞希の容態はかなり深刻なものであった。それこそ命にかかわるようなものであった。しかし幸いなことに、俺が病院に辿り着いた頃には、峠を越えて一命は取りとめた。未だ意識は戻らないままだが。

瑞希が一命を取りとめたと聞き、冷静になったところで事の顛末を坂刑事から聞かされた。

坂刑事ら県警捜査本部は、事件に桂城一族が絡んでいると睨み、午前中は県内の桂城一族を回っていたそうである。そして午後から飯橋の殺害現場を調べるため「うらら」にやってきた。その時、門扉と玄関の扉が開け放しになっていることに気付き、中へ入ってみると世話人の居室で加奈美さんが頭から血を流して倒れていた。坂刑事らに介抱されて意識を取り戻した加奈美さんは、何者かにいきなり襲われたと話し、二階に瑞希がいることを伝えた。坂刑事らが二階の飯橋の部屋へ行くと、部屋には鍵がかかっていた。瑞希を呼んでも応答がなかったため、ドアを蹴破って室内へと踏み込んだ。するとそこには頭から血を流して倒れている瑞希を発見したとのことである。因みに加奈美さんの息子である蓮君は加奈美さんが襲われた隣の居室のクローゼット内に隠れており無事であった。坂刑事

が蓮君にその時の様子を尋ねたが、パニック状態なのか、何も話せなかったそうである。

＞面会謝絶＜

瑞希がいる部屋の扉にこの札が掲げられていた。峠は越えたといっても、意識が戻るまでは何が起こるか判らない。容態が悪い方に急変する含みも持っている。今の俺はそんな悪い方向にしか先の見通しを立てられずにいた。

瑞希の家族へは坂刑事が連絡してくれた。坂刑事によると、ご両親はかなり取り乱していたそうである。ご両親は明日の早朝こちらへ到着することになっている。その時、俺はここにいていいのだろうか？正直、会わせる顔がない。こんなことになって、一体どの面下げて謝ればいいのだ。

ゴツン

俺は自分の頭に拳をめり込ませた。

俺がいけなかった。俺が瑞希を一人きりにしてしまったばっかりに……。あの時、俺も部屋に残ればよかった。あの時、瑞希を無理矢理にでも引っ張って、一緒に老人ホームへ行けばよかった。悔やんでも悔やみきれない。俺は瑞希を守ると誓ったのに、結局瑞希を危険な目に遭わせてしまった。薄っぺらな好奇心と正義感で動いてしまった俺への罰か？　それとも、鬼の一族に触れてしまったがための呪いなのか？　考えても考えても、前向きにはなれない。自己嫌悪という鎖が俺をじわじわと締め上げ続けていた。

「そう、自分を責めるな」

ふと声が聞こえたような気がした。最初は現実から逃げたいがための幻聴かと思った。だから最初は無視していた。しかしその後も「責めるな」と何度も俺の横で聞こえた。それもだんだん声が大きくなってきていた。ある時、俺はたまらず顔を上げた。

キュルキュルキュル……

俺の横で一台の車椅子が停車した。

「すまん。結果的に、アンタ達を苦しめることになってしまった」

車椅子には一人の老人が乗っていた。桂城銀造であった。
「どうして、ここに？」
銀蔵の顔を見た時、思ったことが口に出ていた。
「事件の事はＴＶで知った。大変なことになってしまった。ここまで事が大きくなるとは予想できなかった」
銀造は唇を噛んだ。確かに事は大きくなったが、銀造が何故ここまで悔しがっているのか俺はまだ理解できずにいた。
「ここにいることは、アンタ達が泊まっている民宿で聞いた。あのメモを使わせてもらった」
俺が連絡先として置いてきたメモを見てまず「しまだ」へ連絡した。そしておそらく智子さんから瑞希の搬送された病院を聞いたのだろう。
銀造は車椅子を押していた老人ホームの職員に顔を近づけ、何言か話した。そして銀造の顔が元の馬車に戻ると、職員は銀造を残し、その場を後にした。
「アンタ、新谷と言ったな。すまん、この通りだ」
銀造が深々と頭を下げた。何故この場で俺に頭を下げるのか俺には理解できなかった。
「じいさん、何やってんだよ。意味わかんないことしないでくれよ」
もうこれ以上、俺の頭を混乱させないでくれ。頼むから。
「全てはワシが不甲斐無かったばっかりに。このような恐ろしい事件が起こり、それを止めることがきなかった」
何……？　どういうことだ？　もしかして銀造は、やはり何かを知っていたのか。
俺は顔を上げ、銀造を睨みつけた。ジジイ一体、何を隠している。
そして銀造も腹を括っているようであった。銀造の目には確かに光が宿っている。
「ワシはもう老い先短い。だから逃げも隠れもしない。今こそ話そう。桂城家の忌まわしい秘密を」
俺は聞かされた。そして俺は知った。

桂城家のあまりにも恐ろしい過去を。

二

いつの間にかソファに座って眠ってしまっていた。顔を上げると窓から朝陽がうっすらと差し込んでいた。変な体勢で寝てしまっていたため、肩や首が痺れてしまっている。

痺れた首をコキコキ鳴らして周りを見回した。床を蹴る足音で目を覚ましたからだ。看護士数人が「面会謝絶」の札が掲げられている部屋を出たり入ったりしていた。この部屋にいるのは、瑞希だ。

瑞希！

そうだ、この部屋で眠っているのは瑞希なんだ。瑞希の容態に変化があったのか！？

そう感じた時、俺は一気に目が覚めた。渇いた目をこすりソファから立ち上がった。

「あの！」

俺は部屋から出てきた看護士の一人を呼び止めた。すると看護士はニコッと笑った。

「岡本さん、意識が戻りましたよ！」

看護士の言葉が終わると同時に、俺は部屋に飛び込んでいた。

「そ、壮介く……ん」

頭に巻かれた包帯は痛々しく、そして視線もまだうつろだったが、確かに瑞希は俺の名前を呼んだ。瑞希が、目を覚ました。

「瑞希……。よ、よかった」

俺は瑞希のベッドで駆け寄った。そして思わず目頭を押さえてしまった。

「血圧も脈拍も安定している。もう大丈夫ですね」

部屋を出入りしている看護士が、横からそう告げてくれた。

もう大丈夫・・・。よかった。本当によかった。

それから、瑞希の意識が戻ったことにより、面会謝絶も解かれる

こととなった。俺は瑞希と一緒にいることにした。最初は簡単な受け答えしかできなかった瑞希だが、時間が経過していくうちに、よりはっきりとした話ができるようになってきた。勿論、無理はさせない。

「ごめん、瑞希。危険な目に遭わせてしまって」

とにかく俺は、瑞希に対する申し訳ない気持ちでいっぱいだった。こんな命に関わるようなケガをさせてしまい一時はみんなに会わせる顔がなかった。消えていなくなってしまいたいと思う時もあった。

「壮介君が悪いわけじゃないよ。私が油断したのがいけなかったの」

瑞希の俺に対する言葉は優しいものであった。しかし、その顔に笑顔はなかった。あの時の事を思い出したのか、一瞬の事だっただろうが、とても怖かっただろう。

そして、俺は犯人に対する激しい怒りを覚えた。クソッ、飯橋に続いて瑞希まで！

絶対、尻尾を掴んでやるからな！

コンコン

俺が怒りに燃えている所、ドアをノックする音が聞こえた。俺がドアを開けると、そこには坂刑事が立っていた。

「やあ、おはよう。瑞希さん、意識戻ったんだって」

俺は坂刑事を部屋に招き入れた。

「大分、疲れているようだね。昨晩は寝ずの番だったんだろ？」

すると瑞希がこちらを心配そうな表情でみてきた。

「そうなの？　壮介君、休んでくれていいよ。私はもう大丈夫だから」

確かに昨晩はほとんど寝ていない。明け方いつの間にか眠ってしまっていたくらいだ。

昨晩はとても安らかに眠れるような状態ではなかった。瑞希の容態は勿論だが、もう一つ。昨晩、一人の訪問者がいた。銀造である。

そう、あの時。銀造からの告白が鮮明に蘇ってきた。それはとても恐ろしい告白であった。桂城家にはとてつもない秘密があったの

だ。とてもとても恐ろしい。
俺は部屋の隅に置かれたパイプ椅子を二脚取り出し、瑞希のベッドの横に並べた。
「俺は大丈夫だよ。坂刑事、どうぞ」
坂刑事は軽くお辞儀をして椅子に座った。
「瑞希さん、目が覚めた直後で申し訳ないんだが、私の仕事に付き合ってもらえるかな？　昨日の出来事、思い出せる分でいいから教えてもらいたい」
坂刑事は胸ポケットから手帳とペンを取り出し、瑞希の方を向いた。
正直な事を言うと、こういうのはもう少し後にしてほしかった。瑞希はさっき目が覚めた所なんだ。しばらくはゆっくり休ませてあげたい。あの時のことを、今はなるべく思い出してほしくはなかった。
「あの……」
俺は坂刑事を遮ろうとした。今の瑞希に、これは酷だ。
しかし瑞希は俺の方を見て首を振った。そして坂刑事の方を向いた。
「わかりました。まだちょっとボンヤリしているけど」
そして瑞希は、断片的にではあるが、あの時のことを話し始めた。
俺が「うらら」を出てから、瑞希はずっと飯橋の部屋を片付けていた。途中、加奈美さんに軽い食事を持ってきてもらった以外は、ほぼ一人で部屋にいた。
片づけを始めてから数時間後、トイレへ行くために部屋を出た。その後五分もかからないうちに部屋に戻ってきた。
そして部屋に入りドアを閉めようとしたその時、後ろから腰のあたりに何かがぶつかる衝撃にあった。それから後のことは、全く覚えていないことのことであった。
坂刑事は瑞希の一言一句を殆んど全てメモ帳に書き込んでいた。覗いてみるとメモ帳は真っ黒に塗りつぶしたようになっていた。

「瑞希さんの外傷だが、頭部の他、腰に浅い刺し傷がある。おそらくそのぶつかるような衝撃の際、刺されたものだろう」
話によると、その刺し傷は瑞希のベルトを貫通していたそうである。このベルトが幸いして腰部分は軽いケガで済んでいた。逆に、何も遮るものがなかった場合、こちらの傷が致命傷になっている可能性もあったのだ。そう考えると、背筋が凍る思いであった。
「これからも、ずっとベルトはしておこうかな……」
瑞希が一生懸命苦笑いしてみせた。瑞希も俺と同じ思いなのだろう。
「そちらは、何か判ったことはありますか？」
俺は坂刑事に捜査の進展具合を訊ねてみた。
すると坂刑事は手をヒラヒラ振った。
「いや、まだ何もわかってない。というか、この瑞希さんの一件はとても厄介なんだよ。何たって密室事件なんだから」
「密室？」
俺と瑞希は同時に声を上げていた。それは、どういうことだ？
坂刑事の説明ではこうである。警察が飯橋の部屋にやってきた時、部屋には鍵がかかっていた。それを警察は扉を蹴破って室内に入ったのだ。この部屋の鍵はベッドの上に置かれていた。そしてこの鍵は瑞希が加奈美さんより借りており、ベッドの上に置いたのも瑞希である。これは俺も確認している。
つまり、俺と瑞希が一緒に部屋へ入ってから、誰もこの鍵に触れてはいないということなのである。ならば、何故部屋には鍵がかかっていたのだろうか？
「スペアキーはないのですか？」
俺は坂刑事に訊ねた。すると坂刑事は首を振った。この部屋の鍵は二つあり、一つは部屋に置いてあったもの。もう一つはこの「うらら」のオーナー、つまり加奈美さんの雇い主が保管しているとのことであった。つまり、あの時「うらら」に存在していたのは、飯橋の部屋にあったもの一つということなのである。

一通りの説明を終えると、坂刑事は席を立った。
「新谷君、悪いけどこれから私と一緒に来てくれないか？　現場の確認をしたいんだ」
なるほど、確かに俺は瑞希以外であの部屋に入っていた人間の一人だ。事件前と事件後で現場に何か変化があったかどうかを確かめるということなのだろう。密室で事件がおきているのなら尚更だ。
それは都合がいい。俺も現場を確認したかったし、何より俺は坂刑事には話があった。
話しておかなければならないことが。
「わかりました。同行します。あ、ちょっと先に出といてもらえますか」
すると坂刑事は空気を察したのか。何も言わず部屋から出て行った。
坂刑事が部屋から出て行き、扉が閉まるのを確認してから、俺は再び瑞希の方をみた。
瑞希は俺の目をしっかりと見据えていた。
俺は瑞希の手を握った。そこにはしっかりとした温かさがあった。この温かさに触れた時、力がどこまでも漲ってくるのを感じた。
「責任とってやるよ」
他人が聞いたら誤解されそうな言葉だったが、俺と瑞希はしっかりと繋がっていた。瑞希は大きく頷いた。絶対に、俺が事件の真相を暴きだしてみせる！
その決意を握った手から瑞希へと伝えてやった。
「壮介君、頑張って！」
その言葉を聞いて、一瞬強く握ってから、手を離した。
「なあ、瑞希。昨日の晩、銀造じいさんが病院に来たんだよ。そこで、まだ警察にも言っていないような話を聞いた。桂城一族のとんでもない話、ヘドが出るような話だ」
瑞希はとても真剣な眼差しであった。しかし、俺はその視線を少し避けたかった。だから俺は瑞希に背を向けた。

「なあ、瑞希。実は俺、一人疑っている人がいるんだ。この人が一連の犯人じゃないかって言う人が、一人いるんだ」
すると瑞希は声にならないような声を上げた。「誰？」と聞かれたが、俺は首を振った。今はまだ言えない。瑞希にも言えない。
しかし、俺は瑞希に一つ確かめなければいけないことがあった。
俺は振り返り、瑞希の耳元に顔を近づけた。
「なあ、瑞希。あのビデオのこと、俺とお前以外に誰か知っている人はいるのか？」
俺の問いかけに、瑞希はしばらく考えた後、答えた。
そして、その答えにより、俺の「ある人物」への疑いはリーチ状態となった。

三

「ビデオカメラ？」
「うらら」へ向かうパトカーの車内で、俺は飯橋の部屋にビデオカメラがあったかどうか、坂刑事に訊ねてみた。坂刑事は信号待ちで停車した際に手帳を広げて現場の状況を確認した。
「いやぁ、そこまでは。部屋の私物に関してはリストを作っていないな。そのカメラがどうかした？」
そうか、昨日瑞希があんなことになったから、まだビデオカメラの件を伝えられていないのか。本当はここまで引き伸ばすべきでは絶対になかったが、最早仕方がない。俺は坂刑事に、この事件の発端とも言える、ビデオカメラに映っていた廃屋の不可解な影のことを告げた。
「なるほど。桂城博敏の遺体発見で、君たちが早朝の湖畔にいた本当の理由はそれか」
「すみません。隠しておくつもりはなかったのですが、ズルズルと言いそびれて」
それを聞いた坂刑事はしばらく難しい表情をしていた。重要な情

報を今まで黙っていたことに対する怒りか、それとも充分な聞き込みを行えていなかった自分たちへの苛立ちか、複雑な様子であった。
「もう、成ってしまったことはどうしようもない。次から気をつけてくれ。もう何人も危険な目に遭っているのだから」
坂刑事は唇を噛み締めていた。本当に申し訳ない気持ちでいっぱいだ。
「だとしたら、昨日瑞希さんが襲撃された理由はそれか」
続けて坂刑事はそう呟いた。それは俺も同じ考えであった。犯人は自分の姿が映ったビデオを処分するため、そしてそのビデオを観た瑞希の口を封じるため、犯行に及んだ可能性が高い。
「しかし、何で昨日なんだ？昨日の犯行手口を見る限りでは、処分する機会なんていくらでもあるはずだ」
坂刑事は首をひねった。確かに、自分が犯行に及ぶ姿が映っているかもしれない映像なんて、一秒でも早く処分しなければならない。しかし映像が撮られてから時間が経ち過ぎている。
その答えは明白である。犯人はそのビデオの存在、つまり自分の姿を偶然撮られていたことに気付いていなかった。そしてその事実を、「つい最近」知ったのだ。
「あのビデオを観たのは、知っている限りで俺と瑞希、そして飯橋の三人だけだ」
そう「観た」のは。
「よし。もうすぐ着くぞ」
いつの間にか、目の前に「うらら」の建物が見えてきていた。
パトカーが停車すると、エンジンが停止するよりも早く俺は車外に出ていた。
そして坂刑事が車から出てくるよりも早く、チャイムを鳴らしていた。
チャイムを鳴らしてからすぐ、扉が開いた。出てきたのは加奈美さんだ。加奈美さんの額には大きな絆創膏が貼られていた。昨日、加奈美さんも何者かに襲われ、額に裂傷を負ってしまったのだ。そ

の他にケガなく、入院の必要もなかったが、その姿はとても痛々しいものであった。
「すみません。お身体の方はどうですか？」
後ろからやってきた坂刑事が加奈美さんに声をかけた。加奈美さんはニコッと笑い、「大丈夫だ」と答えた。
そして俺たちは挨拶も早々に、飯橋の部屋へと向かった。飯橋の部屋は扉が開け放し、というよりは扉が取り外された状態となっていた。昨日坂刑事が部屋へ入る際に蹴破ったからである。部屋に入ると、俺はまずビデオカメラを探した。ＴＶの前、ベッド、クローゼットと隈なく探した。
「ないな。……やっぱり」
しかし、ビデオカメラは部屋のどこにもなかった。瑞希の話によると、瑞希はビデオカメラを部屋から持ち出していない。だとするなら、やはり犯人が持ち出したということになる。
「私たちの考えが当たっていたようだな」
そう、当たっていたのだ。俺たちの推理が。そしてそれは、「ある人物」への疑いがビンゴになったことを表していた。
「さてと、それじゃ新谷君。部屋の現状を確認してもらっていいかな？」
俺の背後から坂刑事が声をかけてきた。しかし、部屋の現状についてなんて、正直どうでもいい。
俺は振り返り、坂刑事と対峙した。
「すみません。病院に戻ってください！」
俺の言葉に坂刑事は目を丸くしていた。

四

これから昼にさしかかろうという頃、俺と坂刑事は瑞希の病室にいた。俺と瑞希、そして坂刑事以外は誰もいない。この地方は夏でも窓を開けておけば爽やかな風が吹き込み、暑さを和らげてくれる

が、今は窓を閉め切っている。さすがにムシムシするのでエアコンを入れた。三人は無言、エアコンの乾いた音だけが寂しく響いていた。

俺は一度瑞希の目を見た。瑞希は俺をジッと見据えていた。「私は大丈夫」という思いが伝わってくる。

俺の「ある人物」への疑いが確信に変わった時、この話をしようと決めていた。あまりに恐ろしい話なので、気安く口にはできない話。

それを今ここで全て話す。

「瑞希。昨日の晩、俺が銀造じいさんと会ったって話したよな。その話の内容をこれから話す」

瑞希も俺の様子から何かを感じ取っていた様で、動揺することはなかった。むしろ、この事件の深層へ入り込んでいく決意を固めたようであった。

「坂刑事にも聞いてもらいたい話です。ただ、かなり複雑な話なんで今の所は他言無用でお願いします」

坂刑事は俺の要求に無言で頷いた。

「じゃあ、話すぞ。昨晩のことを」

※※※※※※※※※※

私、桂城銀造は桂城龍造の三男。兄が二人いて、一人は桂城博造。その博造の息子が先日、わしの水崎にあった家で死んでいた桂城博敏。もう一人、博太郎という数年前に亡くなった息子もいた。

そしてもう一人の兄。名前は桂城恭造という。恭造兄は桂城一族の中で唯一穏やかな心を持った「人間」だった。妻には病気で先立たれており、一人娘である都紀美さんと二人で暮らしていた。

私も博造に負けず劣らず、豪腕と呼ばれ危ない橋を渡ってきた。しかし、性格がまるで正反対である恭造とは不思議とウマが合った。共に仕事をして、共に酒を飲んだ。兄という関係以上に、人生の盟

友であった。恭造が笑うと、私も不思議と笑顔がこぼれていた。そしていつからか、私を「鬼の一族」と恐れる人間はいなくなっていた。

確かに私の人となりは丸くなった。しかしそれ以上に、博造の行いが輪をかけたようにひどくなってきたのである。自らの成功のためには他人を蹴落とし、その生血を浴びるように飲む。博造が一つの事業を立ち上げる毎に五、六つの企業は倒産・廃業し、経営者の何人かは家族と共に蒸発してしまった。

私も以前はそんな博造のやり方を善しとしていた。しかし恭造と共に仕事をしていくうちに、博造のやり方について、異論を持ち始めていた。いつしか私は、他人を蹴落とすような仕事をやらなくなり、またそのような仕事に対し、激しい嫌悪を覚え始めた。

そうして私と恭造は博造と対立することが多くなり、三人揃えば落ち着いて話す機会など皆無であった。その内、喧嘩することすら馬鹿馬鹿しいと感じるようになり、博造との関わりは殆んどなくなってしまった。

親父が死んだ後、桂城家はどうなるのだろう。親父が亡くなる直前、私は不謹慎ではあるが、考えることが多かった。私は父の後は、自分か恭造が継ぐことになればと期待していた。自分で言うのも何だが、私と恭造は桂城家であるが地元の方々から信頼されていた。逆に博造は腫れ物に触るような扱いをしていた。戦後の動乱も過ぎ去り、これからは地元とよい関係を作っていくことが桂城家の発展につながると考えていたし、親父もそう考えているに違いないと思っていた。

しかし、私たちの思いとは裏腹に、父は遺言状にて、博造に桂城家全家督を譲るとした。つまり、博造のやり方が桂城家発展の道標であると、親父がお墨付きを与えたということなのである。この後、博造の行動は速く、えげつないものであった。私と恭造は桂城家が運営する企業の役員を勤めていたが、全て解任され、一族への影響力を奪われてしまったのである。また保有していた資産もその殆ん

どを博造に奪われてしまった。
博造ら「桂城本家」が水崎を出て都市部に進出した後、私は僅かに所有していた土地と金を元に、水崎で畑を作ったり土地を人に貸したりして生計を立てた。決して裕福ではなかったが、家族を養うには充分であった。そして恭造もなけなしの金で新たに事業を始めた。その頃、娘の都紀美は佐々岡良弘という男性と知り合い、後に婿養子として桂城家へ向かい入れた。この事業は良弘と共に計画し起こしたものであった。その後一人娘の子宝にも恵まれ、事業は苦しかったようだが、桂城の人間が手に入れることができない「平凡な幸せ」を掴もうとしていた。
しかし、恭造らの幸せは長く続かなかった。桂城本家の妨害により、事業が傾いてしまったのである。恭造と良弘は何とか事業を立て直そうと、金策のため昼夜問わず駆け回った。しかし桂城に睨まれた人間に協力する者などいるはずもなく、事業はあえなく頓挫した。この時、私はできる限り協力した。しかし私にも家族がいた。だから協力するにも限界があった。
そして恭造と良弘は水崎湖畔の林で首を吊って自殺した。
自殺の原因は事業の失敗による多額の借金ということで結論付けられたが、実はもう一つ恐ろしい理由があった。恭造と良弘が金策で駆け回っている間、都紀美は桂城本家へと出向いていた。都紀美は、博造をはじめ桂城一族に父や夫を救ってほしいと、恥そして危険を承知で懇願したのだ。
その懇願を聞いた桂城一族はとても赤い血の通った人間とは思えないような考えをした。
鬼たちはこう都紀美へ言い放った。
「助けて欲しければ、言うことを聞け」
桂城博造、そしてまだ若者であった博敏、博太郎は都紀美の身体に散々な辱めを与えた。言葉に出すのも躊躇われるくらいに。そして鬼たちの歪んだ欲望は都紀美と良弘の一人娘にも及んだ。
都紀美らの生き地獄は恭造らが死んだ後も続いた。そして恭造ら

が死んで一年後、都紀美が病に倒れ、あまりにも不憫な死を遂げた。都紀美の死後、娘は何とか桂城家から脱出し、姿を消した。
そして都紀美の娘は、桂城家の誰かの子を身籠っていたそうである。

※※※※※※※※※※

俺は昨晩、銀造から聞いた話をそのまま伝えた。瑞希も坂刑事も何も話せずにいた。ただ、瑞希の表情は言い様もない不快感が滲み出ていた。
最後に俺は言わなければいけない。最後に、この恐ろしい事実を。
「そして、都紀美さんの娘の名前が、桂城　加奈美」
やはり誰も言葉を出さなかった。
ただ、この病室の空気がこれ以上ないくらい凍りついたのは、ひしひしと感じることができた。
俺が今回の事件の犯人ではないかと疑い、その疑いが確信へと変わった人物、それはペンション「うららら」の世話人、田原加奈美さんであった。
動機は、自分と自分の家族を陥れ、陵辱した桂城一族への復讐。

五

翌朝。
俺は坂刑事と再び飯橋の部屋に来ていた。飯橋の遺品についての状況はほぼ把握できた。瑞希のビデオカメラ以外は、この部屋からなくなっていないようであった。
瑞希はまだ頭痛がすると言っているが、快方に向かっているようである。今はご両親も病院に到着しており、地元病院への転院の準備をすすめているところである。
俺が再び「うららら」に訪れたのは、犯人特定の決定的証拠を掴む

ためであった。今までの状況証拠、そして動機の観点から、加奈美さんが犯人である疑いは非常に強い。しかしそれはあくまで俺の考えの中でしかない。それらを裏付ける証拠が探さなくてはならないのである。それは果たしてあるのだろうか？もしそれがあるとしたら、この「うらら」ではないだろうか。第一、第二の殺人の状況を考えて、この二つの事件は計画的犯行と考えて間違いないだろう。しかし、飯橋と瑞希に関しては、動機が怨みつらみによるものではない。犯人にとって不都合なことを知られてしまったため、当初の計画とは関係なく手をかけてしまったのだ。つまり飯橋と瑞希は突発的に襲われた。ならば、何か痕跡が残っていても不思議ではない。因みに、坂刑事の話によると、第一と第二の殺人では犯人に繋がる物証は何もでてこなかったそうである。

「とりあえず、もう一度この部屋を隈なく調べてみましょう」

俺は坂刑事にそう言い、今一度部屋を隅々までひっくり返してみた。風を起こさないために窓を開けたり、エアコンをつけたりしなかった。閉め切った部屋の中で作業をしていると、いつの間にか顔面汗まみれになっていた。

探し始めてから三時間、未だ不審な点は見つからない。ここで坂刑事の提案により、一度休憩する事にした。坂刑事は一階へ飲み物を取りに降りていった。

俺はシャツの裾で汗を拭き、床の上へ座り込んだ。拭いても拭いても汗が流れてくる。水先へ来て、こんな蒸し暑さを感じたのは初めてだ。

俺はハァッとため息をつき、天井を見渡した。

その時、ある所が目に入った。切り取られた壁である。

「そう言えば、下ばっかり探していて、あそこは全然みてなかったな」

何故今まで放っておいたのだろうか。よくよく考えれば、あそこはこの部屋で唯一鍵を使わずに他の部屋へ通じている部分ではないか。俺は椅子を持ち出し、クローゼットの前に置いた。

ちょうどその時、坂刑事がペットボトルのお茶を持って戻ってきた。
「どうしたんだ？」
ペットボトルを俺の方へ放り投げてから訊ねてきた。
「あそこですよ」
俺は切り取られた壁を指差した。すると坂刑事は苦笑いした。
「おいおい、いくら何でも、そこから出入りはできないよ。通るにはちょっと狭すぎる」
確かに、この壁の穴は小さい。しかし無理をすれば痩身の人なら通るかもしれない。尤も、そうだったとしたら、露骨に痕跡が残っているであろう。
俺は椅子の上に立ち、壁の穴を調べてみた。先日見た時とは状況は何も変わっていない。隣りのクローゼットの天板は相変わらずホコリが大量に積もっていた。
「何か見えるか？」
坂刑事が下から俺の様子を見上げている。その表情から、今俺が行っている行動に対する期待は感じられなかった。どうせ無理だろという感じであった。
「う～ん、暗くてよく判らないな」
確かに変わった所を見つけられずにいたのだが、なんだか癪だったので、そう応えてしまった。ただ、部屋の電灯は少し型が古く、部屋の隅にまで光は行き届かないものであった。よって、俺が見ている辺りは実際に暗かったのである。
「そうか、じゃあカーテン開けるぞ。それだったら光届くだろう」
確かに窓際なので、カーテンを開け、自然光を入れれば一発である。
坂刑事は少し移動して、カーテンを開けた。すると夏の刺すような光が部屋を包み込んでいった。
俺は窓際にいたので、けっこう眩しかった。しかし程なくして目が慣れてきたので、再びクローゼットの天板に視線を移した。

「これは……」
窓からの自然光により、天板に積もっている白いホコリが鈍く光っていた。その中で俺は意外な所をみつけた。
この部屋は飯橋が長期滞在していたため、飯橋がやってきてから掃除が殆んどなされていない。このクローゼットの天板を拭き掃除しようなんて、飯橋はこれっぽっちも考えていなかったであろう。だからこのクローゼットの天板は一面白いホコリが積もっている……はずだった。しかし、天板の一部分に、まるで水滴をこぼしたような跡が何箇所かあり、その部分だけホコリがつもっていなかった。今まで見ても気付かなかったが、窓からの光があたり、積もっているホコリの白さが際立って、はじめて確認することができた。
俺はその点々部分を色んな角度で見てみた。その点々は大体一円玉と同じくらいの大きさで、俺のほうに向かい、扇状につけられていた。
俺はその点々に手をかざしてみた。そして壁の穴を見た。
「おい、どうした。何かあったのか?」
下から坂刑事の声がした。その声に反応し、俺は椅子から降りた。そして入れ替わりに坂刑事が椅子に登った。
「あっ」
坂刑事が小さく声をあげた。天板の点々を見つけたのだろう。
俺は再び壁にあいた穴を見た。
確かに、この穴を大の大人が通ろうとするのは至難の業だ。しかし、この方法なら……。
しかし、そう仮定することはためらわれた。
俺は銀造じいさんの告白より、もっと恐ろしいことを話さねばならなかったからである。
椅子から降りた坂刑事に俺は告げた。
「会いましょう、加奈美さんに。それと、ある方を呼んで欲しいです」

六

「失礼します」

俺はノックをして部屋に入った。部屋には加奈美さんと蓮君がソファに座っていた。俺が部屋に入ろうとすると、蓮君はソファを離れ、部屋の隅の方へ行ってしまった。

ここは世話人の居室。いきなり俺が訪れたことに加奈美さんは少々戸惑っている様子であった。一応ノックはしたが、俺は加奈美さんが返事をする間もなく、部屋に入ってきたのだ。ビックリしないわけがない。

「はい、何か？」

加奈美さんもソファを立ち、一歩前に出て出迎えてくれた。一応笑顔をつくって見せてはくれたが、驚きの感情は隠せてはいない。また額に貼られたガーゼも痛々しかった。

俺は今、加奈美さんと真正面から対峙している。俺がこれから話すことは、とても残酷な事なのかもしれない。しかし、俺は話さなければならない。飯橋、瑞希、そして何より加奈美さんのために。

俺は乾いた下唇を一度舌で濡らし、静かに息を吸った。もう迷いはない。

「加奈美さん。あなたですね」

俺の第一声に、加奈美さんは首を傾げた。俺の声が聞こえ辛かったのか、それとも意味を理解できなかったのか。それとも、シラを切ったのか。

「この一連の……、俺たちが水崎にやってきてから起こった事件、犯人は……あなたですね」

俺の言葉に、加奈美さんは目をそらそうとしなかった。むしろ、俺の目をジッと見つめていた。柔らかかった表情は一転固まり、唇は真一文字に結ばれた。

「俺は先日、桂城銀造さんに会いました。そこであなたが、桂城の人間であるという事を知りました」

桂城……。その言葉に、加奈美さんの眉がピクッと反応した。
「復讐ですか？　家族を崩壊させた桂城本家に対する」
すると、加奈美さんは俺に背を向けた。ソファの前に戻り、俺が部屋に入ってきた時と同じ場所に座った。
そして加奈美さんの真一文字に結ばれた唇が、緩く解かれた。
「銀造さんに会ったということなら、私たちのことは全て知っていますね」
その声を聞いて、俺は背筋が寒くなる思いがした。表情に変化はないし、罵声を浴びせられたわけでもない。しかし、その声に得体の知れない恐怖を感じた。
まるで俺の知っている加奈美さんではない感じがした。
「確かに、今は亡くなった主人の姓を名乗っています。私の旧姓は桂城。みなさんがよくご存知の、桂城一族の人間でした」
気のせいだろうか。「でした」という部分が強調されているように聞こえた。
そして加奈美さんは薄く、笑みを作った。
「でも……。だからと言って、私が殺人事件の犯人というのは、少々ひどくはないですか？　確かに私の家族は本家に散々煮え湯を飲まされました。しかしそれはもう過去の話ですし、私自身も桂城とは縁が切れています」
話す加奈美さんの姿を見て、俺は再び背筋が寒くなる感覚がした。その笑みはとても冷たく感じた。
「銀造さんと話をしたのなら、蓮の事も聞いていますよね」
加奈美さんの言葉が終わってから、しばらく間があって俺は頷いた。蓮君は桂城本家の誰かとの子供であるということである。
「確かに蓮は……私は博壱だと確信していますが、桂城家の人間との間に生まれた子供です」
博壱。いつか「うらら」に俺たちを恫喝にやってきた男である。
「周りの人たちから見たら、蓮は呪われた子供のように映るでしょうね。しかし、私は蓮のことを愛し、自らの子供として、愛情を誰

よりも注いで育ててきました」
加奈美さんのこの言葉に嘘偽りはないであろう。そう確信させる程、加奈美さんの言葉には感情がこもっていた。
「申し訳ないですが、私は新谷さんがおっしゃるような人間ではありません。この事件では逆に私は被害者ですよ。御覧の通り、頭を殴られました」
加奈美さんはそう言って額に貼られたガーゼに手をあてた。
「そう、それですよ」
俺は一歩前に出て、加奈美さんのガーゼにあてがわれた手を指差した。俺の声に驚いたのか、加奈美さんは目を丸くしていた。
そして俺は、この事件の真相を、少しずつ加奈美さんへ突きつけていった。

七

「おかしいんですよ、その傷」
すると加奈美さんはさすがにムッとしたのか、表情がやや強張った。
「では何ですか、新谷さんは、このガーゼが嘘だと？　では御覧になればいい。」
加奈美さんはピッという音と共に額のガーゼを取った。そこには痛々しい縫い傷が隠れていた。
「これでよろしいですか？」
そう言うと、取ったガーゼを再び額に貼り付けた。
確かに、加奈美さんの額に傷は存在する。しかし問題はそこではなかった。
「加奈美さん。俺が思っていたのは、そのガーゼの下に傷があるのかないのかということではありません。何故そのような傷がついたのかということなんです」
俺の言っていることが判らなかったのだろうか。加奈美さんは首

を傾げた。
「では言い方を変えましょう。何故、それくらいの傷で済んだのか？」
「いや・・・・・・、それくらいって、これでも気を失う程の重症だったのですよ！」
加奈美さんは声を荒げた。確かに殴られて「それくらい」も何もない。
しかし、この一連の事件において、それは違った。
「加奈美さん。この一連の事件において、三人もの人間が殺され、あなたの他に瑞希が一時は命が危うくなる程の重症を負いました。第一に桂城博敏。頭部が原型を留めていないほどムチャクチャに殴られていた。第二に桂城好太郎。彼は首から上を刃物でメッタ刺しにされていた。両名に対する強い恨みを感じさせ、確実な殺され方をしている」
聞く人によっては、下から何かが上がってきそうな話を、加奈美さんは表情一つ変えずに聞いていた。俺はさらに話を続けた。
「そしてここで殺された飯橋。その殺され方に強い恨みは感じさせないが、刃物で心臓を一突きし、確実な殺され方だ。瑞希に関しては頭部を何度も殴打。結果死ぬことはなかったが、明確な殺意を感じさせられる」
俺はさらに一歩前に出て加奈美さんに近付いた。
「しかし、加奈美さんの傷は……、それらの殺され方から考えると、とてもあっさりしすぎている」
「いや……それは」
俺は加奈美さんの言葉を遮り、話を続けた。
「加奈美さん。あなたのその傷は、真正面からでないとできない傷です。つまり、犯人はあなたの真正面から攻撃したということなんです。先日坂刑事から聞きましたが、あなたは犯人の顔は見ていないと言った。しかし、犯人の側から考えたらどうでしょうか？犯人は加奈美さんの真正面に立って攻撃した。つまり犯人は加奈美さん

に自分の姿を見られてしまったと感じても不思議ではないんです。
それまで全く痕跡を残さず犯行に及んできた犯人が、自分の姿をはっきりと見たかもしれない人物を、たった一撃で、しかも生死の確認もせずに満足するでしょうか？」
俺はここで少しの間を作った。加奈美さんを見てみるが、その表情に特に変化は見られなかった。
「俺はそうは思わない。俺が犯人なら、今まで行ってきたように、何度も何度も殴り、確実に加奈美さんを殺していたでしょう」
すると、加奈美さんはソファから立ち上がった。
「ならば私が自分でこの傷をつけたとでも？」
その声色には俺に対する挑発の意思が含められいた。
「いえ、その傷は自分でつけることは難しいでしょう」
「だったら、誰に殴られたというの。言っていることがムチャクチャじゃないですか？」
俺の言葉が終わるよりも早く、加奈美さんがまくし立てた。唾を飛ばし、上品だった加奈美さんの面影は、そこにはない。
俺は大きく息を吸った。
俺は、伝える。
「それは……その傷は、蓮君によってつけられたものですね」
「！」
俺の言葉に加奈美さんは顔を引きつらせた。そして一気に脂汗が噴出してくるのが見えた。
俺は加奈美さんの向こう側で、ポツンと立っている蓮君の姿を覗いた。蓮君は顔色一つ変えず、こちらを見つめていた。蓮君が今何を考えているのか、その表情から窺い知ることはできない。
「加奈美さん。これから俺はとても恐ろしい事を話します」
加奈美さんの頬に汗が流れ落ちていく。
「この一連の事件、実行したのは蓮君ですね。飯橋を殺し、瑞希を襲ったのも」
俺はそう加奈美さんに問いかけた。加奈美さんからの返答はない。

しかし俺は続けた。
「坂刑事から飯橋の刺し傷は、下から上へ突き上げられたようなものだと聞きました。不自然ですよね。飯橋は身長百五十センチあるかないかの小柄な体格だ。そんな飯橋の胸へ突き上げるような傷をつけるには、飯橋よりも低い体勢でなければならない。しかし、俺が電話で話している時、犯人と争っているような物音は聞こえなかったし、格好としてもかなり不自然なんです」
加奈美さんは吹き出てくる汗を腕でぬぐった。しかしぬぐった汗は、腕から床へと滴り落ちていく。その視線はもうどこも見ているのか判らない。
「ならば、犯人が飯橋よりも身長の低い人間ならどうでしょうか？
蓮君は同年代の児童と比べても背は低い方ですね。もし、蓮君くらいの身長の人間が、飯橋の胸を突こうとするなら、下から上へ突き上げるような傷ができるのではないですかね？」
蓮君が実行犯……。これが俺の見つけ出した、最も恐ろしい真相であった。何度も自分の考えを疑った。子供が次々と人を殺すなんて、こんな考えに至った俺こそが鬼なのではないかとも感じた。しかし、蓮君を実行犯と仮定した時、全ての辻褄が合っていくのであった。
「そして瑞希が襲われた事件。これで、俺は一連の事件に蓮君が関わっている事に気付きました」
そう、俺は見つけてしまった。あの恐ろしい痕跡を。
「加奈美さん、あなた瑞希が襲われる前、ビデオカメラの件を、瑞希から聞きましたね」
この事件の発端、瑞希のビデオカメラに映り込んでいた廃屋の不可解な影。加奈美さんはそのビデオの存在を知っていた。いや、知ってしまったのである。
俺の推理はこうである。
あの日、俺が銀造さんへ会いに行くため「うらら」を出発した後、瑞希は加奈美さんにビデオカメラの件を話した。自分たちの犯行現

場を撮影したビデオの存在を知った加奈美さんは、そのビデオの回収と口封じのため、瑞希を襲撃することを決心した。そして瑞希がトイレか何かで部屋から出たのを見計らい、蓮君を部屋に侵入させた。そしてこの一件を「密室事件」とするため、鍵を瑞希に持たせ、蓮君は壁の穴から隣りの部屋に移った。

俺はこの推理を、加奈美さんに伝えた。加奈美さんは否定することも、俺の推理に頷くこともなく、無言であった。

「机や椅子が動かされた形跡がなかったから、あの穴から脱出するには横のクローゼットを足場にしなければならなかった。蓮君はクローゼットの扉や引き出しを手足で巧く操作しながら登っていったのでしょう。そして穴に入り込むため、蓮君はクローゼットの天板に手を置いた」

俺は見てもいない当時の状況を、まるで自らの眼でみて、更にそれを映像に残し繰り返し観たかのように話していった。

「何故、判ると思いますか？」

加奈美さんに問いかけた。加奈美さんは無言であった。最早、俺の眼など見てはいない。

「天板に残っていたんですよ、蓮君の指の後が。ホコリの積もった天板に、まるで水滴を垂らしたように残っていました」

あの天板に残っていた痕跡、あれは蓮君が壁の穴へ入る際、身体を支えるためについた指の跡だったのである。

「……何故？」

加奈美さんが微かに唇を動かし、言葉を発した。声を聞いたのを久しく感じる程であった。

「汗ですよ」

加奈美さんの消え入りそうな問いに、間を作らず応えた。

「これは瑞希から聞いたのですが、瑞希は部屋で片づけをしている際、エアコンをつけていなかった。俺たちの地元はこの季節連日真夏日。しかしここ水崎は湖畔ということもあり涼しい気候なので、エアコンに頼る程ではないんです。そんな部屋で、蓮君は犯行に及

んだ。凶器は何か知りませんが、軽いものではないでしょう。そしてその後、クローゼットを用いてのアスレチック。蓮君は多少なりの汗をかき、それを手で拭ったのでしょう。それにより、蓮君の指先には微量の水分が付着した。そんな指先がホコリの積もった天板に触れたらどうなるでしょう？」

「指に……つきますね。……ホコリが」

加奈美さんは途切れ途切れに口を開いた。

「坂刑事の話によると、部屋からは蓮君の指紋は出ていないそうです。つまり蓮君は手袋をしていたのでしょう。だから、天板の跡を調べても指紋は出ないでしょう。しかし、天板に残った跡と、蓮君の指の「形」を照合したら……どうでしょうか？」

俺が問いかけた次の瞬間、加奈美さんの身体が崩れ落ちた。床に両手をつき、嗚咽を漏らした。

俺はこれ以上追及しなかった。チェックメイトである。

俺は扉の方へ振り返った。

いつからそこにいたのか、俺の後ろには坂刑事と桂城銀造がいた。二人は敗者の如く床で泣き崩れる加奈美さんの姿を何とも複雑な表情で見つめていた。

八

「加奈美、……すまなかった」

杖をつきながら部屋へと入ってきた銀造の、最初の言葉がそれであった。銀造はおぼつかない足取りで加奈美さんに近付き、そして深々と頭を下げた。

銀造も今まで苦しみ続けていた。あの時、自分が恭造を助けることができていたなら、自分の生活を投げ打ってでも恭造を助けていたなら、この家族はここまで酷い目に遭わずに済んだ。人を殺めるような真似はせずに済んだ。悔やんでも悔やみきれない、どうしようもない後悔の連続であったことは、想像に難くない。

「遅くなってすまない」
坂刑事が俺に耳打ちをしてきた。
銀造さんをここへ呼んでほしいと頼んだのは俺である。
俺は今回の事件の犯人が加奈美さんと蓮君であると確信した時、ある思いが頭をよぎった。
（何と救われない人なんだ）
加奈美さんと蓮君が犯した罪は決して許されるものではない。何の罪も怨みもない飯橋を殺し、瑞希を傷つけたのだから。しかし、犯人を捕まえて警察に逮捕されたところで、誰も何も救われない。せいぜい、近隣住民という「第三者」が不安から解放される程度のものである。
本当にこの事件を解決するためには、加奈美さんを救わなければならない。そのためには銀造の力が必要不可欠であった。
銀造は遂に膝をついた。手に持っていた杖を置き、床に手をつき頭を下げた。
「加奈美。あの時、お前の父さんや母さんを助けてやれなかったことを許してくれ。この通りだ！」
銀造は頭を下げながら、何度も何度も謝罪の言葉を口にした。その声は時に詰まり、嗚咽のようにも聞こえた。
「……」
加奈美さんもうな垂れて、どこを見ているのか判らなかった。銀造の謝罪の言葉が聞こえているのかすらも俺たちには判断できなかった。しかし、銀造が両手をついて謝りはじめると、それまで崩していた身体を整えて、銀造の前に正座をした。
「銀造さん……どうかお顔をあげてください。いいんです。……もういいんです」
加奈美さんは銀造に手を差し伸べるが、銀造の姿勢は変わらなかった。
「いや、駄目だ。わしが全て悪かったんだ！　わしが……弱かったばっかりに！」

すると加奈美さんは差し伸べた手を引っ込めた。
「銀造さん……今更そんなこと言われても、もうどうしようもないのですよ」
その声はとても冷たかった。
そして加奈美さんは俺と坂刑事を見た。
「よく、ここまで判りましたね。もう降参です」
加奈美さんの言葉に坂刑事が一歩前に出た。
「ということは、認めるんだな」
「はい。私が一連の殺人事件を計画、実行致しました」
次の瞬間、加奈美さんの瞳が揺らいだ。
「……蓮と一緒に」
揺らいだ瞳の先には、窓際で先程から何一つ変わることなく立っていた蓮君がいた。
加奈美さんは視線を再び正面に戻すと立ち上がった。
「銀造さん。どうかお立ちになって下さい」
加奈美さんは銀造の肩を抱いて起き上がらせようとするが、銀造は起き上がろうとせず、依然床に顔を向けていた。
見かねた俺と坂刑事は銀造さんに近付き、三人がかりでようやく立ち上がらせ、ソファに座らせた。
そして加奈美さんも、銀造の向かい側にあった椅子に座った。
「蓮、こっちにおいで」
加奈美さんの呼びかけに蓮君は素直に応じ、隣りの椅子に座った。
「では、お話ししましょう。この事件の真相を」

九

祖父の恭造と父の良弘が自殺してから、私と母は永遠に続くと思える生き地獄の中にいました。
父たちの事業が傾き始めた時、母は何とかして本家の協力を得るため、本家の鬼畜のような要求を飲んできました。それは家族のため

であり、また「終わりのある地獄」と自分の中で割り切っていました。

しかし、運命は本家の人間たちのように鬼の如く無慈悲でした。結局父たちの事業は完全に頓挫しました。それを苦に、祖父と父は無責任にも自ら命を絶ちました。この時、私は初めて父に対し怒りを覚えました。母が本家の人間たちに酷い目に遭っていることは薄々気付いていたはず。なのに助けてくれなかった。それどころか、自分たちだけで逃げてしまった。

その後も、本家の母に対する陵辱は続きました。最初は本家の人間たちは母に対してのみ陵辱を繰り返していました。毎日痛めつけられていく母の姿があまりにも不憫でした。そして私は本家の人間・・・具体的には桂城博太郎ですが、母をこれ以上虐めないでくれ、解放してくれと懇願しました。すると博太郎は、とても人間のものとは思えないような笑顔でこう言いました。

「だったら、お前が母の代わりになるか？」

その言葉の後、部屋に数人の男が入ってきました。その後の事はよく覚えていません。思い出したくもありません。それから本家の牙は私にも向くようになりました。特に当時まだ若かった桂城好太郎と博壱は執拗に私を虐めていきました。

しばらくして、母が病に倒れ亡くなってしまいました。最初はただの風邪だったのですが、適切な処置をとってもらえなかったため肺炎を起こし、最後はミイラのように痩せ衰え、惨めに死んでいきました。結果は「病死」ですが、本家に「殺された」も同然でした。

母の存在は私にとって最後の拠り所でした。その母を失い私は絶望の淵の一番底に叩き落されました。私は母が亡くなってすぐ、母の遺骨を持って本家から逃げました。どこをどう彷徨っていたのか殆んど覚えていません。それくらい必死でした。私は生き地獄の中にいました。しかし、自ら命を絶とうとは思いませんでした。いつか救われることを信じていたし、また私は身重の身体となっていました。忌まわしき桂城本家の「誰か」の子供。しかし、生まれてく

る子供に罪はない。どうしても私は堕胎することはできませんでした。
　気付くと、私は名古屋にいました。名古屋で私はパートを始め、貧しいながらも人生の再出発をしました。その後、一人で蓮を出産し、職を転々としながら必死に蓮を育てていきました。
　そして生活が僅かながら安定していくにつれて、ふと忌まわしき桂城本家を思い出すことがありました。思い出されるのは絶望と恥辱にまみれたものばかり。思い出した私は真夜中に泣き叫ぶ事もしばしばでした。そんな中、頭をよぎりました。
「桂城家に復讐をしなければならない」
　ここで私は、たった一人で本家に乗り込んでいけばよかった。しかし私の隣にはようやく歩き始めた蓮がいました。この子を残してなんかいけない。
　しかし、ここで私の中の「鬼」が囁きました。
「蓮も一緒に連れて行けばいいじゃないか」
　私はとても恐ろしい考えを持ってしまいました。蓮と一緒に桂城家へ復讐しようと。復讐のため、私は蓮を学校にはやらず、私の命令にだけ忠実な殺人マシーンとして教育していきました。
　しかしこの過程で、一つ問題が発生しました。蓮の教育に没頭するあまり、仕事を疎かにしてしまい、経済的に困窮する事態となってしまいました。そんな時、かつての仕事場で一緒だった田原昭彦さんに声をかけられました。「結婚してほしい」と。私は全く気付きませんでしたが、どうも昭彦さんは私に以前から好意があったようです。私には身体が弱く学校に通えない子供がいることを伝えると、昭彦さんはかまわないと言ってくれました。少し悩みましたが、経済的に困窮していたし、また昭彦さんからのプロポーズに対して、私自身満更でもありませんでした。
　そして私は昭彦さんと結婚し、桂城加奈美から田原加奈美へと生まれ変わりました。ようやく、桂城の名前を捨てることができました。

昭彦さんとの生活はとても幸せでした。私にもようやく人並みの幸せが訪れました。
でも私には、忘れることができなかった。
桂城一族への、怨みだけは。
私はそういう運命なのかもしれない。桂城一族への復讐を果たさなければ、本当のハッピーエンドはない。昭彦さんとの生活で、思わず幸せに身を委ねようとしても、必ず私の中にある「鬼」が私の感情を引き止める。そして、囁く。
「お前は自分と家族の受けた仕打ちを忘れたのか？」
私は忘れることができなかった。昭彦さんと一緒になった後も、蓮への「教育」は続けました。そしていつしか、教育した私ですら思わず震えてしまうような、冷血な少年に成長していました。

そして、ある日のこと。昭彦さんが私に伝えてきました。
脱サラして、田舎でペンション経営をしたいと。
その時、私はあまり深く考えず、「昭彦さんの思うようにして下さい」と答えました。しかしここで、私の宿命が動き始めました。昭彦さんがペンション経営の地として選んだのが、ここ水崎だったのです。
私は昭彦さんに、自分の出生を具体的には話していませんでした。だから私が水崎出身であるということも知りませんでした。できることなら、もう水崎には戻りたくありませんでした。だから、私は昭彦さんに別の地方を提案しようと思いました。
しかしその時、再び私の中にある「鬼」が囁いてきました。
「よかったなあ。これで桂城一族に復讐できるじゃないか」
私は私の中にある「鬼」の囁きに苦悩しました。一日頭を抱え、のた打ち回りました。頭を振っても、眼を閉じても、耳を塞いでも、「鬼」の囁きが聞こえる。まるで私の脳に焼印を押されたような気分でした。
そしてある時、私は真っ暗な場所に立っていました。私の身体以

外、何も見えない、判らない暗闇。
そんな暗闇に、突如として現れました。
「鬼」の顔が。
とてもこの世のものとは思えない、醜くそして残忍な表情。その顔が私に語りかけてくる。
「桂城　加奈美。今こそ自らの家族を破滅に追いやった、一族への復讐を果たす時！」
私は無意識に、その「鬼」へと近付いていった。そして手を伸ばせば「鬼」の顔に触れられるところまできた。
「お前も鬼の一族。さあ鬼になれ！　鬼となり、お前の中で灼熱に燃え滾る想いを今こそ解き放て！」
その時、私は走馬灯を見た。そこには優しい祖父とお父さん、そしてお母さんの笑顔があった。
私は言葉では表現できないような声をあげた。
そして私は「鬼」の顔に触れた。すると「鬼」の顔は、私の掌に収まり、自由に動かすことができた。
それはまるで「鬼の面」であった。
その「鬼の面」を、顔に近付けた。私の鼻に触れようとした時、それは消えた。
次の瞬間、私は湖畔に立っていた。明け方の水崎湖。冬は過ぎたが、朝方の冷え込みはまだ厳しい季節であった。私の身体は震えていた。寒くて震えているわけではない。
横に目をやると、そこには蓮が立っていた。蓮は無表情で湖の方を見つめていた。
私は蓮の見つめている方へ目をやった。
そこには、うつ伏せの状態で湖にプカプカと浮いている昭彦さんがいました。
私のことを愛してくれた人が、絶命している。
その時、私はこう思った。
「……はじまった」

十

部屋が静寂に包まれたことにより、加奈美さんの告白が終わったことに気付いた。加奈美さん以外、誰も口を開こうとはしなかった。

とても、とても、恐ろしく、そして哀しい告白。

告白を終えた加奈美さんは、決して憑き物が落ちたような表情はしていない。精気が抜けたようになり、顔を伏せて無言であった。

しばらくの沈黙が続き、坂刑事が口を開いた。

「二年前、田原昭彦は事故ではなく、あなたに殺されたというのか……」

この声に、真相が判明したことによるスッキリ感はない。さらに混迷の闇に飲まれそうになるのを、必死にもがいているような、そんな声だった。

「はい、私が計画し、蓮が実行しました」

顔を伏せた状態の加奈美さん。その表情は窺い知れない。

坂刑事によると、加奈美さんの夫である田原昭彦は、二年前水崎湖畔で変死体として発見されたのだという。死因は溺死。また体内から大量のアルコールが検出されていた。捜査は事件、事故両方から行われていたが、結果として事故死で処理されたのだった。

しかし真相は違った。

「正直、あの晩のことはよく覚えていません。ただ、蓮が私に言うのです。「ママはパパが悪い人だと思ってるんだよね。だから、死ななきゃいけないんだよね」と……」

その声は次第に震えてきていた。もう、俺と瑞希が知っている「加奈美さん」ではない。

「主人はお酒に強いほうではなく、普段は全く飲みませんでした。だから私が無理矢理飲ませたのでしょう。そして外へと連れ出し、蓮が主人を湖に突き落としたのでしょう。ボンヤリとですが、そんな事だったと思います」

そしてこの後も罪の告白は続いた。
この親子の第二の殺人は、同じく二年前であった。桂城博太郎殺害である。自宅の庭で何者かに首を数箇所刺され絶命していたのである。この事件は現在も怨恨の線で捜査中とのことである。しかし、桂城に怨みを持たない人間を探すほうが困難ともいえるこの地方。捜査は困難を極めていた。
ましてや、博太郎の首を刃物で切り裂いたのが、当時八歳の児童であったとは、夢にも思わないであろう。
そして第三の殺人、それこそ俺たちが関わった一連の殺人事件のはじまりである。
桂城博敏の殺害。
あの日、加奈美さんは博敏と連絡を取り、「桂城一族の秘密をバラす」等と言い、博敏をあの廃屋へ呼び出した。そしてあの廃屋で、加奈美さんと博敏は対峙した。博敏が加奈美さんの方へ気が向いているのを見計らい、後方に隠れていた蓮君が、刃物で博敏の足を刺した。怯んだところで、加奈美さんが近くに転がっていた角材で、博敏の頭部を殴打した。
瑞希が撮影したビデオに映っていたのは、その凶行の一部始終であった。
その後、殺害前夜から博敏と共に行動し、姿が見えなくなった博敏を探しに来た好太郎であった。加奈美さんによると、好太郎の殺害は当初の予定外だったそうである。博敏を殺害した夜、遊歩道近くの森で、夕闇にまぎれて蓮君を好太郎に向かってけしかけた。不意を突かれた好太郎はほぼ何もできず、胸から上をメッタ刺しにされ絶命した。そしてその遺体を、湖畔に投げ捨てたのだった。
その告白を聞く度に、坂刑事の表情が険しくなっていった。加奈美さんの犯した罪の大きさに困惑しているのか、それとも、博太郎と田原良弘の真相に気付くことができなかった悔しさか……。
そしてこの事件には、まだ一つ謎が残っていた。
「何故、飯橋を殺さなければならなかったのですか？」

俺にとって、最後であり最大の謎であった。一族とは全く関係のない飯橋が、何故あんな無惨な殺され方をしなければならなかったのか。
加奈美さんは俺の方を向いた。しばらくの沈黙があり、口を開いた。
「勿論……最初は殺すつもりはありませんでした。でも……見られたのです」
「見られたって、何を？」
坂刑事が俺よりも早く訊ねた。
「……母子手帳を」
意外な言葉に、俺と坂刑事は顔を合わせた。
「あの日、私と蓮が帰って来た時、寛子さんは居間で電話をかけようとしていました。その時、寛子さんの手に私の母子手帳が握られていたのです」
すると坂刑事がピンときたようで、パンという音とともに両手を合わせた。
「名前が、載っているんだな。桂城の名で」
加奈美さんは無言で頷いた。つまり、飯橋はこの母子手帳を見て、加奈美さんが桂城家の人間であることを知った。そして、飯橋は加奈美さんもこの一連の事件に関係があるのではと疑った。
あの時、飯橋が電話で俺に伝えたかったこと、それはこの母子手帳の存在だったのだろう。
「しかし、飯橋寛子は何故その母子手帳を見つけたのだ」
そんな知られては困る内容が書かれたモノをそこらへんに放っておくわけがない。
「母子手帳は、私の部屋で保管していました。でもあの日、私は部屋の鍵をかけずに外出してしまったのです」
「そこに飯橋寛子がやって来て、部屋に入った……と」
部屋が物色されていたのは、飯橋がまた変な好奇心を出してしまったからというわけのようだ。その結果、見つけてはいけないモノ

を見つけてしまった。そして知ってしまった。
「瑞希さんの件は、新谷さんのお話でほぼ間違いありません。まさか博敏殺害の現場を撮影されているなんて夢にも思っていませんでした。瑞希さんが部屋を出た隙に、蓮を部屋に向かわせました」
加奈美さんは蓮君の肩を抱き、顔を伏せた。もはや観念したのだろう。
坂刑事が一つ大きなため息をつき、胸ポケットから手錠を取り出した。事件の背後を考えたら、加奈美さんはとても気の毒であった。しかし、犯した罪は決して許されるものではない。坂刑事はこの一連の事件に終止符を打つため、手錠を握り加奈美さんへ近付こうとした。
すると加奈美さんが不意に口を開いた。
「もう一つだけ、教えてください」
声は非常に弱々しいものであった。しかしその中には、確実な意志が通っていた。
「この事件、桂城一族にはどんな影響を及ぼせたのでしょうか？」
そのまま手錠をかけることもできたが、坂刑事はあえて立ち止まった。
「今回の事件、桂城一族は一応被害者側だ。しかし、マスコミが一族についてガンガン書き叩いている。これまでの……桂城一族のヘドが出るような行為が一般大衆に知れたら。社会的信用は地に堕ちるだろう。はっきり言って終わりだよ」
確かに今回の事件、桂城家は一族の人間を三人も殺されているのにもかかわらず、俺には一欠片の同情も沸かない。それは多分みんなも同じであろう。
「それと……銀造さん」
加奈美さんは顔を上げ、ソファでうなだれる銀造にも声をかけた。
「さっきはあんなことを言ってしまって、ごめんなさい。私は銀造さんのことを少しも怨んでなんかいません」
「……加奈美」

銀造さんの目に光るものがみえた。
「昔と変わらない、強くて、優しい銀造おじさん。最後に……会えてよかった」
……最後。その加奈美さんの言葉に少しひっかかりを覚えた直後であった。
「なっ！」
坂刑事が大きな声をあげた。今度は加奈美さんの手に光るものがみえた。
しかしそれは涙ではない。ナイフだった。

十一

「ちょ、ちょっと、加奈美さん！」
「加奈美！」
「おい、馬鹿な真似はよせ！」
俺たち三人は加奈美さんの手に握られているものがナイフと認識し、ほぼ同時に声を発した。
加奈美さんはナイフを俺たちの方へ向け、蓮君と一緒にジリジリと後ろへ下がっていった。坂刑事がナイフを取り上げようとするも、蓮君がまるで人質のようになっているため迂闊には飛びかかれない。
加奈美さんは窓の所まで下がっていった。そしてしゃがみ込み、蓮君の方を向いた。
「蓮、やっぱり駄目だった。お母さんを許して」
加奈美さんの目からは大粒の涙が零れだした。加奈美さんの語りかけを、蓮君は表情を変えずに聞いていた。そこはもう親子二人だけの世界。俺たちの存在など感じてはいない。
「蓮、お母さんは最後の仕上げをしなければならくなったの。だから蓮とはちょっとの間離れ離れになるの。寂しい思いをさせちゃうわね。ごめんね……蓮」
加奈美さんが蓮君に何を言っているのか、俺には全く理解できな

かった。
「いかん！」
異変を感じた坂刑事が、ナイフを奪おうと飛びかかった。
「来ないで！」
加奈美さんの声が、空気を切り裂いた。坂刑事も思わず足を止めてしまった。
そして加奈美さんは、俺たちの方へ向けていたナイフを持ち替え、蓮君に握らせた。
「さあ、蓮。これが最後よ」
大粒の涙が頬を伝い床まで滴り落ちていく。ナイフを握る手にも涙が零れ落ちた。
「このナイフで、お母さんの首を刺しなさい。命令よ」
一瞬で鳥肌が立った。何といういい恐ろしい……。加奈美さん、あなたは何て恐ろしいことを、こんな可愛い子供にさせようとしているのですか！？
「やめろ！」
みんなが口々にそう叫んだ。誰が親が子供に自分を殺せと命令し、その光景を何もせず見ていられようか！
「来ないでって言ってるでしょう！」
加奈美さんが叫んだ。涙で顔はグシャグシャになっており、もう声になっていない。
「さあ、蓮！」
加奈美さんは蓮君の手を離した。ナイフは加奈美さんの手から、蓮君の幼い手中に移っていた。
「……」
蓮君は無言で、無表情でナイフを見つめていた。蓮君は今何を考えているのだろう。母を殺すことを迷っているのか。それとも、どういう感じで刺し殺してやろうかと吟味しているのだろうか？どちらにしても、あまりに恐ろしい考えである。
「やめろよ。もうやめてくれよ！」

俺はいても立ってもいられず叫んでいた。もう考えるより早く、感情が言葉を紡いでいた。
「あんた蓮君の親だろ！　こんな恐ろしい事、自分が腹を痛めて産んだ子にさせんなよ！　蓮君だってこんなこと、望んでなんかないんだ。誰も殺したくなんかないんだ！」
すると加奈美さんは、笑った。とても冷たく。
「新谷さん。確かに蓮は私にとって、命よりも大切な宝物です。しかし、蓮も鬼の一族なんです。蓮の中にも私と同じ鬼が潜んでいるのです。特に蓮は桂城家の人間同士の間から産まれた子供。鬼の血の濃さは一番ですよ」
「そんな、何ということを！」
俺たちは加奈美さんの言葉が信じられなかった。何が鬼の一族だよ！
「さあ、蓮！」
すると蓮君は意を決したのか、持ったナイフを頭上に上げ、刃を下に向けた。
「やめろ！」
そして……、
一瞬のためがあってから、ナイフが振り下ろされた。
その時、俺は見た。
蓮君のそれまで無表情だった顔が、一瞬緩んだ。
それはとても優しそうなものに、みえた。
「あっ！」
俺たちは同時に声を上げた。
目の前には、ナイフが刺さり、血が噴出している光景があった。
一つ、俺たちの予想に反したこと……いや、俺たちの予想を遥かに超えた現実があった。
蓮君は、母の首筋ではなく、自らの胸にナイフを突き立てたのだった。
大声を上げて取り乱す、母加奈美さん。

加奈美さんには見えたであろうか。
あの優しい笑顔が。

第六章　終焉

大学の長い夏休みも残すところあと一週間になった頃、俺は再び水崎を訪れていた。

約一ヶ月ぶりに降り立った水崎は、陽射しも吹く風も柔らかく、もうどこか秋の雰囲気が漂っていた。

そう、俺は一ヶ月前に、瑞希と一緒にここへ来た。もうあれから一ヶ月も経つというのに、ここで過ごした数日間の出来事は、脳裏に焼きついて離れない。つい昨日か一昨日の出来事のように鮮明なものとして感じることができる。

俺は瑞希と初めて水崎にやってきた時と、同じ道を歩き始めた。この道を真っ直ぐ行くと、次第に「しまだ」の看板が見えてきて、その手前に水崎湖へと抜ける別れ道がある。まるで通いなれた道のように歩いていった。

プップッ

後方からクラクションが聞こえた。振り返るとパトカーが俺の後ろにくっついていた。別にやましいことは何もないが、パトカーに呼び止められると構えてしまうのが人という生き物である。少し警戒して車内を覗き込むと見知った顔があった。坂刑事である。

「よっ。電車の到着時刻を調べたら、鉢合うんじゃないかと思ってたよ」

そして坂刑事は、助手席のドアを開けて、「乗って」と合図をした。俺がパトカーに乗り込むと、車は発進した。

この坂刑事との再会は偶然ではない。今から一週間程前、俺が坂刑事に呼ばれたのだ。

事件の結末を知るために。

そしてパトカーは、俺と瑞希がお世話になった「しまだ」を通り過ぎ、またしばらく走った後、ある場所で停まった。

そこは「うらら」であった。パトカーから降りて、「うらら」の

建物を見た時、俺は驚いた。俺が初めて来た時の「うらら」は少し古びてはいたが、綺麗に手入れをされており、人の「温かさ」を感じることができた。しかしあれから一ヶ月。「うらら」には全く温かさは感じられず、まるで何年も前から放置されている幽霊屋敷のようになっていた。

坂刑事は俺を先導し、規制線のテープをくぐって「うらら」の中へと入っていった。

「そうか、瑞希さん退院したのか」

あの事件の後、瑞希は両親の手続きにより地元の病院へ転院した。その後経過は良好で先日無事退院した。大学の後期授業に間に合うことができた。しかし事件に対するショックはまだまだ大きく、今回の水崎行きも瑞希は来ることができなかった。

この事件の終焉を、瑞希と一緒に迎えたかったが、こればっかりはどうしようもない。

俺は坂刑事の後をついていった。玄関から、飯橋が殺された居間を抜けて、あるドアの向こうへ続く廊下へと入った。そこはペンションである「うらら」の中で、唯一内装が整備されていない、「客間」ではない空間。世話人の居室である。

俺たちはその中の「ある部屋」へと足を踏み入れた。

そこは一ヶ月前、俺たちが一連の殺人事件の犯人たちと対峙した部屋であった。

部屋はフローリング敷で、ソファやテレビ、本棚が置かれている、世話人が日頃の疲れを癒す私室である。その部屋の一番奥、窓の所に目をやると、そこの床にはドス黒いシミが残っていた。

そのドス黒いシミを見ると、とても居た堪れない気持ちになった。

あの哀しい親子を思い出すからである……。

あの後、蓮君は病院へと運ばれ、懸命な治療により奇跡的に一命は取り止めた。しかし傷はかなり深いものであり、現在も入院中で

ある。
俺はここへ来た最大の目的である、退院後の蓮君の処遇や加奈美さんのその後について坂刑事に訊ねてみた。すると坂刑事は複雑な表情で話し始めた。
まず蓮君の犯した罪であるが、蓮君が十歳の児童であること、そしてかなり特異な成育歴であることから、責任能力なしということになるそうである。しかししばらくは施設の方で過ごすことになりそうだということである。
そして加奈美さんの方であるが、蓮君の無事が確認された後、警察へ連行。殺人と殺人未遂の容疑で逮捕されることとなった。坂刑事の話によると、取調べには素直に応じているとのことである。
しかし、壮絶な仕打ちを受けた過去による情状酌量はあるにせよ、四人もの人間を殺害しているため、重い刑は覚悟しなければならないとのことである。
ちなみに桂城一族であるが、事件後マスコミによって一族の非道な所業が報道され、社会的地位は完全に地に堕ちてしまった。俺たちを恫喝しに来た博壱は、議員になるため活動していたそうだが、この目論見も完全に消えてなくなった。

「ぼくは、おかあさんが、だいすき。だから、おかあさんをころせない」
「ぼくは、おかあさんのいうことがきけない、わるいこ」
「ぼくは、おかあさんをこまらせるひと、いうことをきけないひとを、ころしてきた」
「だからぼくは、ぼくをころす」

あの時、俺は初めて蓮君の声を聞いた。今まで人を殺めてきたとは思えないくらい、澄んだ声をしていた。母の命令を絶対として育てられてきた十歳の少年。周りからみれば異常な親子関係であったであろう。しかし蓮君にとっては、それが全てであり、その中で母

との繋がりを感じていたのだ。
そんな蓮君が、初めて母の命令に背いた。愛する母を守るため初めて背いた結果は、母にとって何よりも残酷な結果となってしまった。
今加奈美さんは何を考えているのだろうか。復讐への達成感か、それとも……。
愛する息子。自分を大好きだと言ってくれた息子への想いか。
「いつかまた、会えますよね」
このままずっと離れ離れなんて、そんなの哀しすぎる。できることなら、あの二人をもう一度スタートラインに立たせてあげたい。
「ああ、会えるだろう。どれだけ時間が経っても、お互いの命と希望がある限り、必ず会える」
坂刑事は笑顔でそう応えてくれた。加奈美さんは取調べで、連日涙を流し、反省の弁を口にしているようである。それは何より蓮君に対してである。加奈美さんは重い刑を覚悟しなければならない。しかし情状酌量により、死刑は何とか免れそうとのことであった。例え何十年も懲役をすることになっても、お互いが望むならば、必ずまた会える。そして再び親子として再出発できる。
あの親子に、本当の幸せがくることを、俺は願った。

「そろそろ行こうか」
坂刑事が俺にそう促した。気付けばこの部屋に入ってからもうすぐ一時間だ。
俺は踵を返し、扉の方へ向き直った。目の前には坂刑事がいた。
「加奈美さんは、本当に鬼だったんですかね？」
俺の妙な問いかけに、坂刑事は苦笑いをした。「何を言ってんだ？」という感じだ。
「俺は違うと思う。加奈美さんは鬼じゃない。ごく普通の人間なんだ」
加奈美さんは「鬼の一族」と言われた桂城家出身。でも、加奈美

さんは違う。あの人は鬼なんかじゃない。
「被ってしまったんだよ。鬼の面を」
坂刑事が静かにそう応えた。
「それはとても愚かな過ちだったのかもしれない。しかし、田原加奈美はそうしなければ自らを保つことができなかった。全く哀しいよ」
坂刑事はそう言い残し、扉を開けて部屋を後にした。
そして俺も後に続いた。
加奈美さんはどこにでもいるごく普通の人で、ごくありふれた幸せを望んだ。
そんな人が鬼の仮面を被り、今回の連続殺人事件を実行した。加奈美さんはその仮面が放つ魔力に屈し、被ってしまった。決して自ら望んで被ったわけではない。
そんな鬼の仮面は、誰もが持っているのだろうか？
俺はそんな事を考えていた。

最後にもう一度、加奈美さんと蓮君の再出発が、いつか訪れることを心から願い、俺は部屋を出て、そして扉を閉めた。

完

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4754d/

新谷壮介シリーズ　Ｓ－Ｐｒｏｏｆ　鬼の仮面

2010年10月8日14時28分発行